
星のカービィ ゼロの復讐劇Ⅳ -再結晶-

零物質

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ ゼロの復讐劇Ⅴ -再結晶-

【Nコード】

N3271H

【作者名】

零物質

【あらすじ】

ワドルディダークネスとの決戦から1年。彼らは「あいつ」の復活を恐れていた。それはカービィも同じだった。某日、カービィは謎の2人組と遭遇する。彼らの名は「オゼット」と「エヌレー」。カービィは、この出会いがのちに「星をめぐる戦いの渦」に巻き込まれることになるかと思ひもしなかつただろう……。はたして、カービィ達に待ち受ける運命とは・・・！？ゼロ復シリーズ第4弾「再結晶」ぜひご覧ください！！

第1話「カービィ・リターンズ!!」

カービィ「父ちゃん・・・あつちに逝ってから1年半がたつね・・・」

命は巡り廻り、やがてこの地に再臨したとき、彼らの目に浮かぶものは――

あれから9か月もの月日がたった。

彼の背中にはかつてここに存在した父からの遺産を背負っていた。

そして、それからさらに3か月もの月日がたった・・・。

カービィは城を飛び出し、新たな活動を開始していた。

そして、ついにその地で新たな戦いの幕が始まるうとしていた――

星のカービィ ゼロの復讐劇Ⅴ - 再結晶 -

カービィは広い広い草原をただ一人走っていた。彼独自に開発した「クライバイク」で――

・・・プルプルプル

デデデ「・・・あああ!!電話でろーっ!!」

プルプルプル・・・

カービィ「・・・ああ?」

カービィは足元にあつた携帯電話を面倒くさそうにとり、携帯電話を開いて確認する。

ピッ

カービィ「・・・あぁ、デデデか。」
ピッ

デデデ「ああ、もしもし？カービィか？」

パラワド「カービィ、覚えてるツスカーっ!？」

デデデ「あんたは引ッ込んでろ!!」

ドオーンッ

パラワド「ふぎゃぁーっ!!」

電話の向こうで何やら騒いでいる様子。

カービィ「(なにやってんだ?) ええっと・・・久し振りだね。」

デデデ「あんたが城を出て行ってからは結構さみしかったんだぞ!

!おお!？」

カービィ「あいにく予約がいただよ・・・。」

デデデ「はぁ!？予約!？あんた何始めたんだよ!？」

デデデはとてもびっくりしていた。

カービィが別の場所で活動をしていたのは知っていたが――

カービィ「ああ、「ティンクルデリバリーサービス」だ。」

デデデ「てい、ていんこーでりばりーさーびす?」

カービィ「ティン・クル・デ・リ・バ・リ・ー・サ・ー・ビ・ス
ウウーッ!!」

デデデ「で、それは一体何なんだ!!」

カービィ「宅配屋だ。」

デデデ「た、宅配屋あーっ!？あんたいつのまにそんなの・・・。」

カービィ「いま一番忙しいからまたあとで。」

ピッ

デデデ「おい、ちよっ・・・。」

プー、プー、プー・・・

カービィに勝手に切られた。

デデデ「勝手に切るんじゃないやねえよ!!」

デデデは受話器を勢いよくパラワドにたたきつけた。

バーンッ

パラワド「のわぁーっ!!」

この数分後、ある大変な出来事が起こるとは、このとき誰も知らなかった・・・。

ブウウウン・・・

カービィ「・・・はあ、今日の荷物はいっぱいあるなあ。まずはモーリイ夫婦の宅配か・・・。」

カービィは宅配物を手に取り、最高時速で目的地まで飛ばし始めた。そんなとき、カービィが走っているのを崖の上からじっと見ていたやつがいた・・・。

???「・・・オゼット、あのピンク玉が8世か?」

オゼット「エヌレー、あれこそがティンクルポポ8世、別名「星のカービィ」だよ。」

エヌレー「あの野郎が俺たちの母を・・・うぐ・・・うぐ・・・」
オゼット「泣くんじゃないよ。標的はもう目の前なんだ。」

崖の上に立っていたのは、謎の二人組であった。

オゼット・・・目と足が赤く、全身が白いカービィとイメージすればいい。

エヌレー・・・オゼットの「目がまんまるバージョン」とイメージすればいい。

エヌレー「オゼット、俺様は勝手にいつとくが、あんたはいかないのか？」

オゼット「高見の見物がしたいんだよね、僕。」

エヌレー「お、俺だけ行けてのか!？」

オゼット「しょうがないさ。」

エヌレー「チッ、10分我慢してやる。」

エヌレーは指をパチンと鳴らし、「白の大型バイク」を出現させた！！

ドオンッ

エヌレー「オゼット、これ最高時速どれくらいだ？」

オゼット「1000はいくけど・・・オーバーヒートしても保証しないよ、僕。」

エヌレー「知るかよ!! ったく、俺行ってくるよ!! 10分したらぜってえ来いよな!!」

ブルウウウンッ!!!!

エヌレーはエンジン音を大きく鳴らして急発進し、崖をそのまま飛び降りてカービィのもとへと向かった。

オゼット「僕にはどうしても母さんが必要なんだ・・・!!」

オゼットは齒を食いしばりながらエヌレーにすべてを託した。10分後に行く約束を忘れながらも・・・。

ブウウーンッ

カービィ「・・・ん!？」

カービィはとても強烈な気配を感じ、とつさに後ろを向いた。
その視界の先には、白い姿をしたあいつがいた――

エヌレー「8世いいーっ!!!」

カービィ（だ、誰だ・・・!？）

カービィはそう思いながらバイクの収納部からマスターソードを取り出した。

シャキンッ

マスターカービィ「誰なんだおまえは!？」

エヌレー「母を隠したのはお前なんだろ!？さっさと母を返せええーっ!!」

マスターカービィ「母って誰なんだよっ!!」

カービィはマスターソードを横に力いっぱい振り回した。
だがエヌレーはバイクごと大ジャンプをした。

ブオオオオーンッ!!!

マスターカービィ「んあぁっ!？」

エヌレー「これが俺からの罰だ!!」

その瞬間、空中にいたエヌレーから「ガンブレード」で頭を6発連続撃ち抜かれた!!

バババババァーッ!!

マスターカービィ「ぐごああーっ!!」

カービィの頭に6つの穴ができ、勢いよく血が飛び散った!!
カービィは平衡感覚を失い、そのままクラッシュして崖に突っ込み、大爆発した!!

ドッキヤアアアンツ!!

エヌレー「ふふ・・・!!」

エヌレーはそのままスピードを上げてクラッシュしたカービィのもとへといった。

エヌレーは現場に着き、徐々に近づく。

エヌレー「さあてつと、母を…ってありやあっ!? あ、あいつどこいった!!」

なんとその現場にカービィはいなかったのだ!!

それでは、カービィは一体どこへ行ったのだろうか?

カービィ「う・・・う・・・。」

???「カービィ、大丈夫か?」

カービィ「ああ・・・え、メタ・・・ナイト・・・?」

カービィの目の前にいたのは、あのメタナイトであった。

メタナイト「久しぶりだな。24か月ぶり・・・だよな?」

カービィ「2年ぶり・・・って言えよ・・・。」

カービィは頭を押さえながら苦しそうに発言する。

頭を押さえたその時、頭に包帯が巻かれているのに気付いた。

カービィ「包帯・・・メタナイトが・・・？」

メタナイト「ああ。かなりひどくてな。頭に穴が何個もできていたぞ。」

カービィ「ええ・・・。」

カービィは想像もできなかった。自分がそんな状態になっていたとは――

カービィ「ところで・・・ここは・・・？」

メタナイト「ここはププ草原のはずれの洞窟だ。私が上空を飛行していたときにカービィの姿が見えてな・・・。」

カービィ「え・・・あ、そうだ・・・僕を・・・どうやって助けたの？」

メタナイト「バイクが突っ込む直前に音速でそっちに行った。その時の会話が脳裏から離れない・・・。」

メタナイトは脳内の記憶よみがえらせる――

メタナイトはカービィを音速で助け出した。

メタナイトはすぐさま上空に戻り、頭から血がだらだら流れ出ているカービィを揺さぶった。

メタナイト「おい、しっかりしろ、カービィ!!」

だが返事はない。意識不明のようだ。

メタナイトがうなだれる中、メタナイトはあの2人組の様子を一部始終見た。

エヌレー「さあてつと、母を…ってありゃあっ！？あ、あいつどこいった！！」

そう叫んだ瞬間、赤い光がエヌレーの真後ろで放たれ、その光からオゼットが現れた。

シューンッ

オゼット「約束通り10分後に来てやったよ…でも遅かった。」

エヌレー「ごめんよー、取り戻せなかったよおーっ！！」

オゼット「心配しないでよ。まだ標的は上空にいるよ。」

メタナイト（あ、あいつ気づいていたのか…！！？いつ…！！？）

その直後にやや大きめの手裏剣が何十枚も足や腕に刺さった。

メタナイト「ぐっ！！」

メタナイトはすぐさま超音速で洞窟を捜しに行く…。

エヌレー「ああーっ！！あいつどこかいったぞーっ！！追うか！？」
オゼット「いい。いずれ、「細胞再結集」は果たされる…。」

カービィ「…そんなことが…。」

メタナイト「カービィ、あの2人組は一体何なんだ、知らないか？」

カービィ「いや…まったく知らない…。」

カービィ「でも…なんか「母を返せ」とか…言ってたな…。」

メタナイト「あいつらの「目的」は一体何なんだ・・・？」

メタナイトは頭を深く抱え込んでいた。
またカービィも深い悩みを抱えていた。
再び悪夢がよみがえるのか――
カービィはただただ祈るのみであった。

ついに始まった、新たな物語！！

カービィは宅配物を渡しに行っていたが、途中で「オゼット」「エヌレー」と名乗る謎の2人組に遭遇し、大ピンチに陥ってしまう。
そこへメタナイトが入り、カービィは間一髪で助かる。

だが、助けられても不安が消えることはなかった・・・。
果たしてカービィ達に待ち受ける運命とは一体どのようなものなのだろうか・・・！？

第2話に続く！！

第1話「カービィ・リターンズ!!」(後書き)

こんにちわ、零物質です。

カービィゼロ復シリーズが無事復活いたしました。

今回は全28話(多分)ですのでご了承ください。

今回もほぼ毎日更新しますが、月&水は更新しませんので。はい。
では、これからもよろしく願います。

第2話「7世様からのお呼出」

「前回のあらすじ」

デデデ「おつすー！みんな久しぶりだなー！」

パラワド「またこのコーナーができてよかったツスー！」

デデデ「よし、やるのも久しぶりだし、いっちょやってやるかー！」

パラワド「では、どうぞー！」

デデデ「カービイが新しい職業に就いてから数か月もの月日がたった某日、白い容姿をした「オゼット」と「エヌレー」という謎の2人組と遭遇する。カービイは大ピンチに陥るがメタナイトが助けに入り、阻止することができた。」

パラワド「それにしてもあの2人組は「母」だの「母さん」だのと言ってたツスが、何のことツスかね？」

デデデ「ってかあの2人組は何者だよー！」

メタナイト「あいつらの「目的」は一体何なんだ・・・？」

再び悪夢がよみがえるのか――

カービイとメタナイトはただただ祈るのみであった。

とその時、カービイの携帯電話が鳴り始めた。

ブルブルブル・・・

カービイ「ああん？」

カービイは携帯電話を開いて確認を見ると、そこには「ティンクルポポ7世」の文字が・・・。

カービィ「は……？今頃……何の用事だ？」
ピッ

カービィ「もしもし……？」

7世「カービィか？今すぐこちらに来てほしい。」

カービィ「どうして……？」

7世「とにかく来てほしいんだ。場所はオレンジオーシャン。」

カービィ「言わなくても……わかるよ。ああ……。」
ピッ

カービィは携帯電話を閉じ、メタナイトに視線を向ける。

カービィ「メタナイト……行くよ。」

メタナイト「何の話だ？」

カービィ「なんか……オレンジオーシャンにこい……とか。」

メタナイト「誰と電話してた？」

カービィ「行けば……分かる。」

メタナイト「はあ……。」

カービィはメタナイトにバイクを捜査するよう指示し、2人バイクに乗ってオレンジオーシャンへと向かった。

カービィ「……お届けもの……どうしょつか……。」

メタナイト「そんなの気にするな。」

カービィ「……。」

「オレンジオーシャン」

カービィ達は到着後、早速7世のもとへと向かう。

メタナイト「この「ティンクル城」も久しぶりに見る……。引ッ

越したらしいな。」

カービィ「メタナイトは・・・知らなかったの・・・！？2年半も・・・前に引越したんだよ・・・！！」

メタナイト「なんでカービィが知っている・・・？確かカービィはカプセルの中に・・・。」

カービィ「その時の記憶は・・・なかったけど・・・一応1年ほど前に・・・おじから聞いたからな・・・。」

メタナイト「そういえば1年前にマルクとの決戦があつたと聞いたが、その周辺か？」

カービィ「その1週間くらい後に・・・わかったことだ。それに・・・今突つ立つて話す場合じゃ・・・ないでしょ？」

メタナイト「・・・そのようだな。」

2人は門の横にあるチャイムを鳴らし、7世を呼んだ。

そして7世は門の向こうからゆっくりとやってきた。

ギィィィ・・・

7世「おお、カービィ！！来てくれたか！！っておい、カービィ、頭どうしたんだ。」

カービィ「ちよつと襲撃にあつてね・・・。」

カービィは苦しそうに頭を押さえながら発言する。

その言葉を聞いた瞬間、7世の頭にあの2人が浮かぶ。

7世「・・・あの2人のことが・・・。」

カービィ「え・・・？」

7世「とにかく中に入れ。」

メタナイト「はっ。」

彼らは広い広い白の中へとはいっていった・・・。

くティンクル城・第2応接室付近く

カービィ「・・・ったく、おじは案内もしないのか・・・。」

メタナイト「やれやれ、昔と何も変わってないようだな・・・。」

カービィ「聞いたぞ・・・。戦友だった・・・そうじゃないか・・・。」

メタナイト「それもすべて・・・。」

カービィ「おじからだ。」

そう話しながら第2応接室に入ろうとノブを触った瞬間、ドアの向こうからいきなり誰かが襲ってきた!!

バタンツ

???「どりやあーっ!!」

カービィ「わわーっ!？」

メタナイト「ふんっ!!」

2人は突進してくる誰かを素早くよけ、部屋の中に真っ先に入ってドアを閉めた。

ガチャツ

???「ギヤアーツ!!」

カービィ「おい・・・メタナイト、今の絶対・・・リックだよね?」

リック「おい、ちょ、開けろおおーっ!!!!」

カービィ「ほら!!」

メタナイト「自業自得だ・・・。しばらくこうしておけ・・・。」

しばらくすると横のドアから7世が出てきた。

7世「やあ、お2人さん。」

メタナイト「改めて・・・久しぶりだな、カーダス。」

7世「その名前で呼ぶのはやめようよ。」

7世は顔を真っ赤にし、笑いながら天井を見上げた。

7世「・・・ふう。」

カービィ「・・・で、本題は・・・？」

カービィは真剣な顔をし、7世を見つめる。

7世「私はあの時兄さんを・・・」

カービィ「またその話なの？」

7世「カプセル、実は・・・」

カービィ「飽きた。帰っていいか？」

カービィは7世がまともに話さないで頭カンカンだった。
そんな様子を見た7世は本気モードになる。

7世「・・・おじがこうやって言うのもなんだが、カービィ。力を貸してほしい。」

カービィ「力・・・？何があつたんだ？」

7世「知ってるだろう？今「ダブルメテオ」が迫っている。その影響で多大な被害を受けている。」

カービィ「せいめいきかじりよく生命帰化磁力の・・・ことか？」

7世「それを受けたやつは1ヶ月後には緑の粉になっている恐ろしい力だ。」

7世はその直後今まで隠していた片手を見せた。

カービィ「え、おじ……。なんで左腕を包帯してるんだ……？」
7世「実は……。」

7世は包帯を解いた。ほど

その手には、緑の模様が……。

カービィ「おじ……。まさか……。」

7世「私もだ。生命帰化磁力……。とても憎い……。」

カービィ「なんでダブルメテオが……。この星に迫っている？」

7世「その質問に答えよう。実はこの話は5年も前になるんだ。」

カービィ「え……？」

カービィはぼかんとした顔で7世を見つめる。

7世「5年前、天文観測隊が見つけた、2つの隕石が交差しながら目的へと突き進む「ダブルメテオ」。私たちはなぜこの星に近づいているのかを調査し始めた。そして1つの可能性が出た……。」

カービィ「可能性……？」

そういうと、7世は全身がふるえながら答えを言い出す。

7世「……。零式だ。」

リック「おゝい、あける。」

室内のみんな完全無視。

メタナイト「なぜだ？ 零式はクラウドイパークにいた。そんなはずがない。それに死んだ。」

7世「んじゃあ奴の精神はどうだ？ あの時消滅せず、この宇宙をめぐっているとしたら……。どうだ。」

メタナイト「ばかな。そんな証拠がどこにあるんだ……。それにあまりにも強引過ぎだ。」

7世「では、これを知っているかな、「零式戦記」を。」

カービィ「聞いたことがある……。でも内容は全く知らないよ。」

7世「その中の1節にこう書いてある。「幾多の星、双隕石の力によって滅亡せん。その力の主を「零式」と名乗る」とな。」

そういうと「零式戦記」をコピーした本を取り出し、その文章が書いてあるページを見せた。

カービィ「うわ……。」

7世「零式は「無」と「血」の力で小惑星を操る力を持っている。しかも「2つ」だ。」

カービィ（ホントなのか……。!?）

カービィは目が皿のようにまん丸になっていた。

7世「そんなこともあったから私らは零式が今までどれだけわれら全生物に影響を与え続けたのか、痕跡を調べ始めた。」

カービィ「はあ……。」

カービィはいい加減だった。こんな説明を聞く身にもなれよ、と叫んでいる……。

7世「その一環としてある場所を調査した。もちろん知ってるよな。」

リック「キラメキマウンテンでの調査だろ？」

カービィ「あ、リックいたの？」

リック「だまつとけ!!! つか開けるー!!!」

カービィ「……。んで、おじ、その調査がどうかしたのか？」

また完全無視・・・。

7世「先日、キラメキマウンテンの第7洞窟で調査した・・・。そこで予想外の出来事が起きた。」

メタナイト「あいつらの出現・・・なのか？」

7世「そうだ。彼らの名はオゼットとエヌレー。あの2人は私たちのチームを襲撃した。あいつらはお前たちも狙ってるはずだ・・・。」
メタナイト（まさか・・・。）

メタナイトはあの白い姿をした「やつ」を思い出す。

7世「城に入るときに襲撃だのなんだの言っていたが、それもおそらくその2人のはずだ。違うか？」

メタナイト「やつらは何者なんだ？」

7世「何者と言われても我々にはわからん。だが、彼らは明らかに「零式」と深いかわりがある。もし彼らが関係あるとすれば彼らがやることはただ一つ・・・。」

カービィ「なんだ、その1つって・・・。」

7世「零式、復活・・・だ。」

7世は汗を思い切りかいていた。

カービィ「零式が復活・・・？んなばかな・・・。」

7世「では今から本題に入る・・・。」

カービィ「ええ、今からが？」

カービィはとつてもうんざり状態・・・。

7世からの呼び出しでティンクル城に向かう。その先でリックに出

会うものの・・・。

その後室内でさまざまな話をするが、その中で3つの言葉が出てきた。

「ダブルメテオ」「せいめいきかじりよく生命帰化磁力」「零式」。

カービィはこのキーワードを聞き、恐怖におののく・・・。

このあと、彼らの戦いはさらに拡大し、大変なことになっていく・・・。

果たしてこれからどうなっていくのだろうか・・・。

第3話に続く！！

第3話「オゼットの目的」

「前回のあらすじ」

デデデ「たなばたばたばたばたばたばたばた．．．」

パラワド「大王様、なんか変ッスよ。」

デデデ「．．．んが？」

パラワド（ぎゃあ、顔があーっ！！）

デデデ「どうしたZOY？」

パラワド「え、いや．．．それよりもさっさとあらすじを！！」

デデデ「あらすじ？もうそんな時間か？」

パラワド「そうッスよーっ！！さ、早くやるッス！！」

デデデ「はあ．．．。」

デデデ「前回7世からの呼び出しでティンクル城に入る。応接室に入ろうとしたときにリックと遭遇するが、メタナイトの判断で無視することに。その後、応接室内で7世と会談。その中に「零式」の名前が出てきた。そしてやつらの名前も．．．。」

パラワド「おお！！今回はいいッスね！！」

デデデ「あんたに評価される筋合いは全く「な・い・ZOY」！！」

ドッキヤアーンッ！！

パラワド「あぎゃあーっ！！」

デデデ「一件落着。」

7世「では今から本題に入る．．．。」

カービィ「ええ、今からが？」

カービィはとつてもうんざり状態の様子。．．．。

7世「あのオゼットらに対抗するにはカービィ、おまえの力が必要

なんだ。そこでだ。私と手を組まないか？」

カービィ「もちろん・・・組むよ。言われなくてもね。でも・・・ひとつ気になることがある。」

7世「なんだ？」

カービィ「あいつらのいつていた「母」って・・・いったいなんのことが知らない？」

7世「さあ・・・。」

7世は苦笑いをしながら横に顔を傾ける。

カービィ「なあ、おじ。」

7世「ハハ、どうした？」

カービィ「・・・なんか隠してるよね？」

7世「私は知っている限りのことをすべて話したんだ。チーム内に秘密は必要ないよ。」

カービィ「・・・。」

カービィはその場を立ち、ドアへと向かった。

それを見たメタナイトもカービィの後についていく。

カービィがドアノブを持つとしたとき、7世が発言した。

7世「カービィ、おまえもほしいはずだ、あいつらの情報。そして生命帰化磁力に関する情報も。」

カービィ「・・・それは確かにほしいけどさ・・・。」

7世「いつでも私に頼れ。ほしい情報は知っている限り全部くれてやる。」

7世はそう言い、そのままソファの横になる。

カービィはドアを開いた。

その時、あいつがあらわれた。

リック「倒してくれたら報酬やるぜ？」

カービィ「久し振りに会ったかと・・・思ったら、おまえ・・・！！」

カービィはドアを激しく押しあけてそのまま出口へと向かった。

リック「なんであんなに怒ってたんだ、あいつ。」

メタナイト「リック、今のカービィには関わらないほうがいい。おまえのためだ。」

リック「はあ・・・。」

リックは頭をかきむしった。

そのあと、メタナイトもカービィについていった。

リックは最上階の広い展望台をエレベーターで向かい、その地に降り立った。

チーン

ブウン

リック「やっとなついたか。」

リックは両腕をブランブランさせながらあの「鳥」の横に来る。

リック「なあ、クー。」

クー「・・・カインのことか？」

リック「まだ見つかってないのか？」

クー「いつ見つかるんだろうなあ・・・。」

クーは青空を見上げる。

リックもそれに続いて同じ空を見る。

リック「あれから2年・・・か。俺感動したよ、カービィに久しぶりに会えて。」

クー「聞いたぞ。まともに口をきいてくれなかったらしいな。」

リック「んまあな。」

リック「でも、ホントいやだった。2年前。1秒でも遅かったら宇宙はもうなくなってた。」

リックは声を震わせながらそういう。
それに応じるかのようにクーも発言。

クー「確かにそうだな。あの時1度死んでしまったが、生き返れたのもカービィのおかげだ。」

リック「そうだな・・・。」

リックはその直後、最初のあの話をしだした。

リック「そういえばカイン・・・。本当に大丈夫なんだろうな？」

クー「心配するな。鈍感で悪運が強いんだからさ。」

リック「だよなー!!」

リックは大笑いしながら体を1回転させてまた前を向く。

とその瞬間、エレベーターが突然爆発した!!

ドッキヤーンッ

リック「のあっ!!」

クー「ああーっ、なんだ!!」

彼ら2人は黒煙に書き込まれたエレベーターの先に現れた黒い影を

見つめる。

その黒い影とは・・・

5分後・・・

ドゴオーンッ

クー「ごあぁっ!!」

バタッ

リックとクーはそれぞれ応接室に急ぎ、7世を守ろうと必死に戦ったがその場で倒れてしまった。

そいつはそのまま7世にゆっくりと近づく。

???「ティンクルさん、嘘は泥棒の始まりだよ？」

7世「泥棒はドロツチエに言ってくれよ。でもオゼット、悪かった。本当のことを言おう。」

7世「じつはあの調査であんたに襲われたせいではなくしてしまった。」

オゼット「・・・今度こそ信じていいの？今度嘘だったら承知し・・・」

7世「ああ。命をかけて誓う。」

オゼット「へえ。そうなんだ。ならさあ、確認のためにこれにサインしてよ。ね？」

そついうとオゼットは一枚の紙を渡した。

7世「ああ？「カイン殺人許可」・・・？くだらん。なんのまねだ？」

オゼット「それに誓ってよ。それとも嘘なの？」

7世「そこまでしてなぜ手に入れようとする。おまえの目的は何だ

？」

オゼット「僕らには母さんが必要なんだ。特に細胞はどうしても。」

7世「・・・細胞再結集を果たす気か？」

オゼット「母さんの細胞でこの星を破滅に導くことができるんだよ？それなのにさ、あんたたちがどこかにやったからさ。」

オゼットは笑い声をあげる。

オゼット「ティンクルさんも知ってるよね、生命帰化磁力。」

7世「・・・。」

オゼット「あれは母さんの思念が頑張ってるおかげなんだよ。母さんがあの隕石に遺伝子、分けたんだ。」

7世「なんとも・・・くだらん。」

オゼット「それなのに僕たちは母さんの居場所さえつかめない。仕方ないよ。僕たち、思念体だからさ。」

7世「思念体・・・？」

7世は首をかしげる。

オゼットは急に鋭い目になり、7世の顔の目の前にまで迫る。

オゼット「僕たちはねえ、母さんを手に入れるまで元通りにはなれないんだ。」

7世「なにがしたい。」

オゼット「ティンクルさん、気づいてるよね？」

7世「何の話だ？」

そついうとオゼットは両手を大きく広げる。

とその時、オゼットの背中にあいつの翼が――

7世「・・・！？」

オゼット「……！」

7世の目には、オゼットの姿とあいつの姿が重なっていた。

7世「……零……弐……。」

7世の目はいつしか恐怖おののく目へと変わっていった。
そのころ、カービィはと言えば――

サクッ

カービィ「また倒れてるよ……。」

カービィは父の墓代わりとして立てていたブルーランス（青い槍）
6本を立て直した。

カービィ「父ちゃん……変な奴らが現れたけど僕……どうすり
やいいんだろ……？」

カービィが墓の前で泣き崩れた。
とその時、頭に電気が走るかのような激しい頭痛を引き起こした――

カービィ「あ、あああ……！！！！ぐあああーっ！！！」

カービィが頭を押さえたまま下を向いた瞬間、頭から緑の粉が――
――！！

サアア……

カービィ「あ、ああ、あああ、あああ……！！！！！」

まさか、あの磁力――！！

カービィは言葉にも出なかった。

その時、脳内で誰かの声が――

???「私に、すべての絶望を――」

カービィ「ぜ、零式・・・!?!」

そしてまたあの痛みがカービィを襲い続ける。

零式「感情をふるまう演技はやめろ。心もどきの所有者が。」

カービィ「な・・・なんの・・・ぐ・・・ああ・・・!?!」

カービィはそのまま墓の前で倒れた。緑の粉まみれのまま・・・。
それをちょうど発見したメタナイトが急いでカービィのもとへと駆け付けた。

メタナイト「おい、カービィ、しっかりしろ、カービィ!?!」

メタナイトはすぐさま近くの「ププタウン」にカービィを移動させる――

一方、デデデ城前では・・・

ドロツチエ「久し振りにやってきたぞ、デデデ城!?!」

スピン「はあ・・・。」

ストロン「・・・。」

ドク「ふう・・・。」

ドロツチエ団はそのままエントランスホールへ。

ドロツチエ「相変わらず広いなあ。」

ドク「柱が無駄に立ってるだけじゃけどな。」
スピン「た、確かに……!!」

ドクが爆弾発言をした!! デデデがいたらどれだけ怒っていたか……。

とその時、背後から謎の男がはいつてきた。

バアンツ!!

ドロツチエ「あ？」

ドロツチエの視線の先には、白い姿をしたやつがいた。

エヌレー「おい、そのデカミミ団。俺の暇つぶしに付き合ってくれないか？」

ドロツチエ「ドロツチエ団だ!! その一言余計なんだよ!! ってかおまえ誰？」

ストロン「そんなのに付き合う暇なんてないもー!!」

エヌレー「ほお、そうかそうかそうか……。ならば無理矢理でも付き合ってもらうよ!!」

戦闘が始まった!!

オゼットがティンクル城に侵入し、リックとクーを倒した!!

オゼットは7世とゆったりと会談をし、自分の正体や目的の一部を明かした……!!

そのころカービィは墓参りをしていたが謎の頭痛に襲われる。その時、「零式」の声が脳内で響き始めた……。

そして、ドロツチエ。彼らはデデデ城に遊びにやってきた、だが、白いあいつが入ってきて城内大混乱となる……。

はたして、カービィは……!!? そしてドロツチエたちは……!!

第4話に続く!!

第4話「力を司る者 VS エヌレー 前編」

「前回のあらすじ」

デデデ「……。」

パラワド「……大王様？」

デデデ「……んが？」

パラワド「……お化け。」

デデデ「ひぎゃああーっ！！」

パラワド「大王様！！いい加減税率下げてくださいッスよ！！
92%なんてひどいッスよ！！」

デデデ「予算を確保するのが大王の勤めZOY。」

パラワド「うわ、あほ大王がほったらかしたッス……。」

ドカーン

パラワド「うぎゃあーっ！！」

デデデ「そのうち上げるZOY。」

パラワド「あげて……どうすんの……。バタッ」

デデデ「んじゃ、前回のあらすじと行きますか。」

パラワド「……。」

デデデ「前回、突然ティンクルポポ7世のもとへとやってきたオゼット。話していくうちにわかってきた彼の目的、そして、7世はあの悪魔と姿が重なった。「……零・弐……」そのころ、カビーは墓の前にいた。だが、あの磁力の影響で激しい頭痛になる……。そして、あいつの声が脳内に響く……。そして、ドロッチェ。彼は遊び目的でデデデ城にきた。だが突如、エヌレーがやってきた……。」

パラワド「詳しいけど簡潔にーっ！！」

デデデ「ああ？」

パラワド「（やばっ）バタッ」

デデデ「……気のせいか。」

エヌレー「おい、そのデカミミ団。俺の暇つぶしに付き合ってくれないか？」

ドロツチエ「ドロツチエ団だ！！その一言余計なんだよ！！ってかおまえ誰？」

ストロン「そんなのに付き合う暇なんてないもー！！」

エヌレー「ほお、そうかそうかそうか……。ならば無理矢理でも付き合ってもらおうよ！！」

戦闘が始まった！！

ドロツチエはさっそくトリプルスターを取り出した！！

ドロツチエ「なんでこんなことになるんだよ！！」

ドロツチエは柱を駆け上がり、上から3連発攻撃を仕掛けたが、エヌレーが回転しながら華麗によける。

3つ星はそのまま地面に激突し、ドロツチエのもとへ。
その直後、エヌレーはある武器を取り出す。

エヌレー「ふふふ……。？」

シャキン

ドロツチエ「あれは……。超大鎌……。！！」

エヌレーは自分の身体の6倍の大きさを誇る「超大鎌」を取り出した！！

エヌレー「おれの母はどこだ？ここにいるんだろ？」

ドロツチエ「マザコンが！！いい加減にしろ！！」

エヌレー「貴様らああーっ！！ぐがぁーっ！！」

シュガァーンシュガァーンッ

エヌレーは柱を2本連続「木端微塵」に切り裂いた！！
そのまま崩れ落ちてドロツチエ団を襲う！！

ゴゴゴゴオーッ

ドロツチエ「ドク、いくぞ。」

ドク「任せるんじゃない、はっ！！」

ドクはいきなり光ってドロツチエの手元へと渡った。

ドロツチエの手元には、2つのハイパーガンが・・・！！
そう、この「ハイパーガン」の正体「ドク」なのである！！

ハイパーガンドロツチエ「・・・よし！！」

ドロツチエはハイパーガンを即座の上に構え、そのまま何十発も発射し、すべてのがれきをぶち壊した。

最後の大きいがれきを破壊した瞬間、そこからエヌレーが！！

エヌレー「ひゃーっ！！」

ハイパーガンドロツチエ「なっ・・・ああーっ！！」

ドロツチエはエヌレーの超大鎌をともに食らい（しかも顔）、そのまま横へと吹き飛び、大きな階段を一気にぶち壊した！！

ドツカァーンッ！！

ドロツチエ「ぐ・・・。」

ドク「あっ・・・！！」

ストロン「だんちゅーっ！！」

スピン「じじいーっ！！」

2人はドロツチェとドクのもとへと駆け付けた。
だがすぐ後ろにはあいつの魔の手が……。

エヌレー「居場所を吐くんなら今のうちだぜーっ!!」
ブオンツ

スピン「やばいでチュー!!」
カアンツ!!

スピンは巨大な手裏剣「特大手裏剣」で防ぐ。
スピンはそのまま上向きに押し返し、エヌレーはななめ上へと吹き
飛ぶ。

エヌレー「くっ、んな馬鹿な。」
シュツ

スピン「このおーっ!!」
エヌレー「きやがったか!!」
「ごらあっ!!」
ガアンツ!!

スピンとエヌレーは空中で切りつけ合いの勝負となった。
その間、ドロツチェは……

ドロツチェ「……ストロン……。」
ストロン「なんだも〜?」
ドロツチェ「あれやるぞ。」
ストロン「んじゃ、さっさとやるも〜!!」

そのままストロンは光ってドロツチェの手元に行く。
今度はドロツチェの身体と同じくらいの大きさの「クラッシュアーク
ローブ」になってドロツチェの武器となる。

クラッシャーグロブドロツチェ「・・・よし・・・!!」

ドロツチェは、空中でスピンと闘っているエヌレーのもとへ。

カンカンカカカンッ

エヌレー「てめえし・つ・こ・いーっ!!」

クラッシャーグロブドロツチェ「スピン!!そこだけ!!」

スピン「え、うわぁ!!」

スピンを無理やりどかし、エヌレーの目の前へ!!

そして、そのまま気をため・・・。

クラッシャーグロブドロツチェ「マザコン、覚悟しろ!!」

エヌレー「貴様ぁー!!」

クラッシャーグロブドロツチェ「ブラストパーンチッ!!」

チュッガアーンッ

エヌレーの腹に直接ブラストパンチを下向きにくらわせ、そのまま下に行って2階の床を突き破り、1階の大理石の床に大激突した!!

ボオオオーンッ!!

ドロツチェ「ったく、おまえのほうがし・つ・こ・いーっ!!」

ストロン「面倒くさいもーっ!!」

そついった直後、がれきからエヌレーが出てきた!!

ボォーンッ

エヌレー「貴様らぁーっ!!どうして母の居場所を教えん!!」

ドロツチェ「なんのことかわからんだろっが!!まったくそんな

の知らんしな!!」

エヌレー「ぐおおおおーっ!!」

エヌレーの体から赤色の気が……!!

その直後、ドロツチエがあるものを呼び出す。

ドロツチエ「青チューリンども!!」

青チューリン達「ちゅー!!」

ジジジジ……

エヌレー「え……!!」

ヒュンヒュンヒュンッ

ボツキヤアアーンッ!!

エヌレー「ああああーっ!!」

エヌレーはたくさんの巨大爆弾を直接くらい、またしてもがれきに埋もれる。

その影響で、かなり壊れていた階段が全壊した!!

柱も、窓も、シャンデリアもほとんどすべて壊れてしまった!!

ドロツチエ「はぁ……はぁ……」

ドク「デデデ城が……」

ドロツチエ「んまあ大丈夫だろ……」

とその時、空中からハンマーを抱えて誰かが襲ってきた

???「俺様の城をめちやくちやにすんじゃねえええーっ!!!!」

ドツキヤアーンッ!!

ドロツチエ「わぁーっ!?!」

ドロツチエは間一髪でよけた。

ドロツチエが前を向いたとき、目の前にいたのは・・・そう、あの「デデデ」だった!!

デデデの攻撃はすさまじく、地震を起こしてさらに大理石の床を陥没させたのだ!!

デデデ「ドロツチエ!! 今見たぞ!! 何爆弾投げさせたんだ!!」

ドロツチエ「違う!! 俺はあのへんな白い奴と闘ってただけだ!!」

デデデ「白いやつ・・・? エヌレーのことか?」

ドロツチエ「なんだかしらんが、「母はどこだ」とか・・・って話とく場合じゃねだろうがぁー!!」

デデデ「キレたいのはこっちだわー!!」

ドロツチエとデデデのケンカはますますエスカレート。

そんなとき、がれきからエヌレーが・・・!!

ガラ・・・

ゴゴゴゴ・・・

ドロツチエ「おい、あっち!!」

デデデ「ああ!? 何の話・・・ん?」

みんなは横を見た。その先にはエヌレーの姿が!!

エヌレー「貴様らぁーっ!! くそ、デデデまでいたのかぁーっ!!」

デデデ「オゼットとの話はもうついた!! これ以上何があるんだ? OY!!」

エヌレー「黙れ黙れ黙れえーっ!! ああああぁーっ!!」

そういうとエヌレーは空中へと浮いた。

そして、背中からあの翼を生やす――

バサァッ!!

エヌレー「ふんっ……。」

デデデ「あ……。ああ……。」

ドロツチエ「おまえ……。なんで……。零式の……。」

エヌレー「俺は……。ただ感じてるだけなんだ……。俺は……。俺は……。なんにも知っちゃいないんだぁーっ!!」

エヌレーは猛スピードでデデデに向かって切り裂こうとした!!

デデデ「おおっとぉ!!そんなことしても俺様は倒せないZOY。」

デデデは大鎌を急いでハンマーで横に受け流す。

その直後に見つめたエヌレーの目は、恨みの領域を超えた恐ろしい目をしていた。

エヌレー「……。今に見ろ……。母の力が偉大であることを知らしめる……。!!」

デデデ「生物もどきが何の話をしてるZOY?」

エヌレー「うあああああぁーっ!!!!」

エヌレーは我を失い、脳内が狂い始める。

突然現れたエヌレー。ドロツチエ団とすさまじい闘いを繰り広げ、エヌレーがピンチになってドロツチエが迫ろうとしたところでデデデが参上!!

デデデの存在に気づいたエヌレーは更に気を発し、そしてついにあいつと同じ翼を生やす。

はたして、ドロツチエ団とデデデはどうなるのか……。!?

第5話に続く!!

第5話「力を司る者 VS エヌレー 後編」

「前回のあらすじ」

パラワド「大王様がいないので僕が代りにやるッス!!」

「???」とおーっ!!」

ドキヤーーンッ

パラワド「ぎひゃーっ!!」

バタッ

7世「私にやらせろよ。」

7世「ええつと、前回ドロツチエらはエヌレーの襲撃にあい、対決となる。ピンチになったところで迫ろうとしたとき、デデデがやて来て喧嘩になる。そのあと再び立ち上がったエヌレーはあの翼と同じものを背中に生やす・・・。」

パラワド「う・・・うゝん・・・。」

7世「(やばっ) ほっ!!」

ドキヤーーンッ

パラワド「ぎゃふんっ!!」

バタッ

7世「ふう。」

エヌレーの目は、恨みの領域を超えた恐ろしい目をしていた。

エヌレー「・・・今に見ろ・・・母の力が偉大であることを知らしめる・・・!!」

デデデ「生物もどきが何の話をしてるZOY?」

エヌレー「うあああああぁーっ!!!!」

エヌレーは我を失い、脳内が狂い始める。

エヌレーは何千回も何万回も「キチガイ」であるかのようにデデデに向かって振り回す。

エヌレー「うああ！！うああ！！うああああ！！」

ブオンブオンブオンブオンッ！！

デデデ「だ、か、ら、無駄、な、抵、抗、は、やめ、ろぉーっ！！」
ガンガンガンッ

デデデは必死にハンマーで守るが相手の振り回すスピードがあまりにも早すぎた。

ドロツチェ「なにやってんだよ！！おい、スピン、こっち！！」
スピン「おいつす！！」

そういうとスピンは光ってドロツチェの武器に。

今度の武器は巨大な「くない（先端がとがってて柄が輪のやつ）」
を両手に2つもつ「ダブルデカクナイ」。

ドロツチェはそれを持ってエヌレーに背後から襲いかかる。

だが、その気配を察知したエヌレーは超大鎌を後ろにも振りかかる
！！

ドロツチェはダブルデカクナイをクロスにして防ぎ、そのままエヌレーを襲う。

デデデ&ドロツチェVSエヌレーの対決。そのお互いの力
は何と対等！！

エヌレーは1つの超大鎌だけで、左右にいるデデデとドロツチェと
対等に戦っているのだ。

そのあと、ドクヤストロン、さらには大量のチューリン達までエヌ
レーを襲ったがそれでも対等に戦いぬいた。

ガガンカン、ドドド、バゴーン、ゴゴゴ
エヌレー「ぐがあああーっ!!」

そして次の瞬間、エヌレーの羽が突然でかくなって大きく羽ばたい
た!!

その勢いで全員吹き飛ばされる。ただでさえ傷ついているのに・・・。

ゴアアーツ

デデデ「ああーう!!」

ダブルデカクナイドロツチエ「ぐおっ!？」

ストロン達「うわあーっ!!」

みんなボロボロだった。それはエヌレーも同様だった。

エヌレー「ああ・・・ああ・・・ああ・・・」

エヌレー「母を・・・母を返せ・・・母をおお・・・!!あああ・・・!!!!」

エヌレーは超大鎌を光らせ、そして2つに分離させた!!

エヌレーはそのまま翼をはばたかせて天井を突き破り、地上200
mの位置に留まる。

そして・・・

エヌレー「・・・流星群よ、今我のもとへ・・・!!はああ・・・!!」

そう唱えた瞬間、空からたくさん光るものがこっちに向かってきた・・・。

そう、彼の唱えた「流星群」であつた!!

音速を超えるスピードで向かってきた流星群はエヌレーを巻き込み、そのままデデデ城へ・・・。

ゴゴゴ・・・

デデデ「な・・・なんだ・・・!？」

ドロツチエ「ああ・・・?」

ヒュゴゴゴゴオオオーッ!!

デデデ「なあっ・・・ああーっ!!」

シュオオオオオーッ

デデデ城は一瞬にして破壊された。

デデデ城どころか、デデデ城の城下町まで壊されたのだ!!

プププランドの中心的な存在だった「デデデ城」はエヌレーによって一瞬にして粉となった・・・。

その跡はともひどいものであった。

炎は今も激しく、原形もとどめておらず、歩くところはすべてがれきがれきがれき・・・。

それはまさしく「地獄の正体」だった。

一番被害の大きいデデデ城にはがれきすら見当たらない。そこには星の中心核につながる大きな穴がいくつもあった――

そして彼らは今、どこへ――

そのころ、カービィ達のいるププタウンにも「地震」という形で被害が伝わった。

ドッキヤアアーンッ

メタナイト「ああっ!？」

メタナイトはびっくりはするものの冷静に対処し、そして地震はおさまった。

メタナイト「いまの地震は・・・？」

メタナイトはとっさに外に出た。

メタナイトが斜め上に視線を向けた。

その視線の先には、デデデ城があつた場所がとてつもなく激しく土が吹きあがり炎が燃え盛っている姿であつた。

メタナイトは啞然としていた。

メタナイト「デデデ城が・・・！！」

メタナイトはすぐさまカービィに変わりの看病役をつけ、デデデ城へと急いでいく。

くデデデ城く

メタナイトはこの悲惨な状況を見て胸が苦しくなる。

その苦しさをこらえながらデデデ城跡地へと向かう。

そこは完全な空洞になっていた。跡形あとかたもなく消えていた・・・。

メタナイトは完全な絶望に陥った。だがここでうずくまるわけにもいけない。

メタナイト「なぜここに・・・。何が落ちたのだ・・・？」

メタナイトが空洞を観察していたその時、ドロツチエが真っ黒焦げの状態で横に倒れているのを見つけた。

メタナイト「・・・！？ドロツチエ！！」

メタナイトはすぐさまドロツチエのもとに行く。

メタナイトはドロツチエを揺さぶる。

メタナイト「おい、ドロツチエ、しっかりしろ、おい!!」

何度か揺さぶったところでドロツチエが目を覚ます……。

ドロツチエ「う……うん……? おれ……え……メタナイト……。」

メタナイト「何があつたんだ!!」

ドロツチエ「わからない……。」

メタナイト「誰に襲われた!!」

ドロツチエ「エヌ……レー……。」

メタナイト「エヌレー……!?!」

メタナイトは7世のあの言葉が思い浮かぶ……。

メタナイト「まさかあいつがここにきてたとは……。」

ドロツチエ「……はっ!?! あいつら、うつ……!!」

ドロツチエはいきなり起き上がるが、全身が痛すぎてまた体がだらんとなる。

メタナイト「エヌレー……。」

その瞬間、メタナイトの腕に激痛が走る……!!

ゴアッ

メタナイト「な……ああ……!!」

メタナイトは手首を握り、震えを抑えようとした。
その時、脳内にやつの姿が現れる。

零式「斬るためにある腕など必要ない。」

メタナイト「な、あ．．．！！うおお．．．！！」

その瞬間、右腕全体からあの例の緑の粉が一気に出始めた。

メタナイト「私まで．．．！？」

零式「朽ち果てよ．．．。」

メタナイト「あ、ああ、ああ．．．ああーっ！！」

メタナイトは気を失ってしまう。

．．．う、うう——

メタナイト「．．．ん．．．、．．．はっ！？う、ここは．．．。」

メタナイトが目覚めたのは、360度すべて赤いガスの空間に包まれていた場所であつた。

メタナイト「なんだここは．．．な．．．体が．．．！！」

メタナイトは金縛りにあつてた。それはそのはず．．．

???「自称元騎士。」

メタナイト「零．．．式．．．！！」

零式「自由なき時の思いを知れ。」

メタナイト「零式．．．おまえは．．．」

そう言おうとしたとき、金縛りがさらに強くなる。

メタナイト「な．．．うああ．．．！！」

零式「星に墮ちろ．．．！！お前に存在意義は全くない．．．！！」
メタナイト「ぐ、ぐおああああー．．．」

メタナイトはいきなり金縛りがとかれ、その瞬間メタナイトは下へ下へと落ちていった．．．。

メタナイト「．．．はっ！？え、ここつて．．．．．」

メタナイトがいきなりガバツと体を起こした。

メタナイトが今いる場所は、ティンクル城の寝室である。

メタナイトは横を振り向いた。その先にはカービィとドロツチエがいた。

横を向いたと同時に、右腕が動かなくなっていたことがわかった。

メタナイト「ぐ．．．。やはりこれか．．．。でも包帯は誰が．．．？」

リック「何で倒れてたんだよ？」

メタナイト「リック．．．。」

寝室のドア前にはリックとクーの2人がいた。

メタナイト「あんたが連れてきたのか？」

リック「ああ、そうだが？」

クー「そういえば、あんたデデデ城いつてたんだよな？」

メタナイト「ああ。」

クー「デデデもワドルディ達もいなかった。それにドロツチエがいたからあいつらも城にきてたはず。」

メタナイト「おそらく．．．。」

リック「どうするんだ？」

メタナイト「私がこの腕のままじゃ無理だ。それに．．．。」

クー「確かにそうだな・・・。」

リックとクーはドロツチエとカービィに視線を向ける・・・。

暴走したエヌレーと戦っていたデデデとドロツチエ団。だがエヌレーの「流星群」によって一気に決着がついた。

その結果デデデ城や城下町が一瞬にして消え、デデデ城跡地には大きな空洞ができた。

その影響による地震で、気になったメタナイトはデデデ城に行く。ドロツチエを見つけて話をするものの、例のあの「緑の粉」が腕から一気に出て、気を失う。

メタナイトは眠っている間、あの悪夢を見ていた。悪夢を見終えた後に起きた場所は・・・ティンクル城内だった。

果たして、これからどうなっていくのだろうか・・・！？

第6話に続く！！

第6話「ファウンテン・オブ・ドリーム」

「前回のあらすじ」

リック「ワドルディ達もデデデもいなくなったから今回からおれたちがやるぜー！」

クー「騒ぐ場合じゃないと思うが・・・。」

リック「んじゃあ、そんなわけでさっそくあらすじだーっ！」

クー「だからはしやぐな。」

リック「前回エヌレーが流星群落としてデデデ城を壊したんだよね。んでメタナイトがそこに行ったらドロツチエが倒れてたんだよね。

んでいろいろと話してたらメタナイトの腕から緑の粉が出て倒れた・・・。んで悪夢を見て気が付いたらティンクル城にいましたとさ・・・。」

クー「・・・実に無駄な言葉が多い。もうちょっと省いたらどうだ？」

リック「さーてつと、そろそろ部屋に戻るか。」

クー「無視するな、メタボ「リック」！！」

リック「は？なんちゃ？」

クー「メタボ「リック」は黙ってる！」

リック「おまえ、何言ってんじゃああーっ！！」

4時間後・・・

クー「か・・・かった・・・。」

リック「あふ・・・バタッ」

リック「どうするんだ？」

メタナイト「私がこの腕のままじゃ無理だ。それに・・・。」

クー「確かにそうだな・・・。」

リックとクーはドロツチェとカービィに視線を向ける・・・。

リック「こいつ、起きる気配が全くしない・・・。」

クー「ドロツチェもそのようだ。」

メタナイト「私はなにも守れなかった。ほかの所に行っていたすきにカービィが生命帰化磁力の影響を受け、デデデ達もみんな消えた・・・。」

そういつた瞬間ドアの向こうからあの人が見れた。

???「オゼツト達は「夢の泉」へ行つた。」

メタナイト「カードラス!!」

メタナイトの視線にうつつた人とは、「7世」のことであつた。

メタナイト「夢の泉とはどういうことだ?」

7世「あの連中は目標を果たすための第2段階として「強力な悪夢」を植え付けようとしている。」

メタナイト「かつてナイトメアが実行したものをまた行うつもりなのか?」

7世「おそらくそうだろう。」

メタナイトはあの時の恐怖が目に見え浮かぶ――

メタナイト「悪夢を植え付けるといったよな?それは我々に対してか?」

7世「いや、我々ではない。星に植え付けるつもりだ。」

メタナイト「どういうことだ。」

7世「命の源はどこから来ている？星の地核だ。星の地核に悪夢を植え付けるとどうなる？」

メタナイト「命が排出するのが止まる＝新たな生命の誕生がストップする・・・というわけか。」

メタナイトの額に汗が目立ち始めた。

7世の目も血走り始める。

7世「私は今から行くつもり。メタナイトはどうするんだ？」
メタナイト「私は・・・。」

メタナイトはそのまま黙り、20秒ほど静まった空気になる。

リック「・・・いらするんだけど。」

クー「じれったいぞ。」

リックとクーは先に部屋から出る。

部屋に残ったのは7世とメタナイトの2人。

7世「それとも私かメタナイトが残るか？」

メタナイト「それなら私が残る。」

7世「カービイらの看病か？見るだけなら行ったほうがいい。目を覚まさない以上は何の力にもなれない。」

メタナイト「・・・。」

メタナイトはとても悩んだ。

メタナイト「それでも心配だ。私はここに残る。」

7世「・・・しかたがない、私が行くでしょう。」

7世はドアを開け、部屋を出る。
そのころ・・・

〈夢の泉〉

夢の力から湧き出た聖なる水が存在する「夢の泉」。
その夢の泉に、やつらがいた。

オゼット「・・・これは・・・？」

エヌレー「あのフグが隠してたんだぜ？」

オゼット「へえ、こんなもの隠してたんだ。」

フグはデデデのことであることは言うまでもない（笑）。

こんなもの・・・それは「コピー能力薬」である。

これさえ飲めば簡単にコピー能力を取得できる薬として開発されていた。

まだ実験段階なので危険かと思われていたが・・・。

エヌレー「この薬の原液、実は母さんの細胞を使用していたって知ってたか？」

オゼット「許せないね。どうして母さんを道具として使おうとするんだろう。」

オゼット「でもこれらがないと再結集は果たせない。」

エヌレー「おい、召喚カプセルもあるぞ、1つだけだが。」

エヌレーは上に上げて振ってみる。

オゼット「すばらしいね。母さんの遺してくれたものはみんなすばらしいよ。」

エヌレー「なあ、これってやっぱりデデデが隠してたのか？」

オゼット「いや、あのティンクルポポが隠してるんだ。」

エヌレー「え？」

オゼット「ティンクル家は昔から母さんを隠すのが好きなんだ。」

そういうとオゼットは腕に直接「炎」のコピー能力薬を2つ埋め込む。

エヌレー「んじゃ、ティンクル関係の所を片っ端から探せばいいんだな？」

オゼット「ああ。そうだよ。・・・もうすぐだ、もうすぐですべての命が失われる・・・。」

エヌレー「楽しみだな。」

エヌレーは箱の中にあるコピー能力薬を右手左手にたくさん持って光に当てる。

オゼット「・・・その前にあの連中に文句を言わなくちゃ。」

そういつた瞬間、先ほど埋め込んだコピー能力薬を起動させた。そして自分の力と組み合わせるとてもなく強力な技を発動させた！！

シユドキヤアアアンツ！！！！

エヌレー「うおおあっ！？」

エヌレーはすぐさま後ろに下がり、よける。

そのまま「夢の大樹」と呼ばれる大きな木を一瞬にして粉にし、大爆発を起こした。

その影響で近くにいたスピン達はビクツと跳ね返った。

バァァーンツ！！
スピィン「わっ！？」
オゼット「ねえ？」

そのころ、7世は夢の泉を目指していた。
今、その直前の「夢の森」という紅葉だらけの森をバイクで走っていた。

7世「まったく、メタナイトのやつ、どうして行こうとしないんだ・
・！！」

7世は怒ってた。
それと同時にオゼットに対する怒りの気持ちもあふれ出てきた。

7世「どうしてだ・・・。あの時話したはずだ・・・。」

7世は最高時速で向かう・・・。

45分後――

7世「夢の泉が見えてきた・・・。この辺のはずだ。」

7世がそういったその瞬間、上から突然撃たれてバイクがパンクした！

ババババァーンツ
7世「が、ぬああーっ！！」
ドキァァーンツ

バイクはそのまま気に突っ込んで炎上した。

その直後、7世が炎から吹っ飛んで出てきた。

7世「うあぁっ!!」

ズサァーッ

7世はすぐに立ち上がる。

その直後、目の前にいたのは……。

オゼット「噂をすれば、影とやら……だね。」

エヌレー「さあ、母を返せよ。」

7世「いきなりこんなお出迎えとは、派手だねえ……。」

オゼット「母さんがどんな思いでいることか……。」

エヌレー「俺……俺……悲しいぞぉおーっ!!!!」

そういうとエヌレーはあの超大鎌を出現させた。

7世「へえ……。避けてはくれないのか？」

オゼット「母さん返してくれないと困るんだ。細胞再結集にはどうしても!!」

7世「……仕方がない。」

そういうと7世は地面から14本の白い槍を出現させた。

そう、彼の武器は「フォーティーンランス」である。

彼はこの14本の乱を自由自在に操れる騎士であつたのだ。

7世「……本当にやる気なのか？」

エヌレー「やるぜ。」

そういうとエヌレーはジェットのコピー能力薬を背中に6つ埋め込んだ。

ゴオオオオ・・・

エヌレー「ふふ・・・。」

7世「・・・やりますかね！！！」

オゼット「ふっ！！」

戦闘が始まった！！

オゼットは何も手に持たずに7世に降りかかる。

7世は2本のランスを手に持ったまま技を発動した。

7世「いくぞ、「槍の雨」！！」

そついうと7世は残りの12本の槍を上により、急降下させた。

その槍がオゼットに降りかかる！！

だが、オゼットはすべての槍を高速で払いのけた！！

カカカンツカカンツ

オゼット「ふふ・・・。」

7世「あんた、武器を持ってるだろう？」

オゼット「持つてはいないけど・・・。」

そついうと腕を上には振る。

その瞬間、腕から白い刀が生えた。

腕を止めてしばらくするとその白い刀は消えた。

7世「な・・・！？」

オゼット「さあて、これはなんでしょう？」

オゼットのこの武器は「オールノーブレード」という名の武器であ

る。

7世「こりゃまた・・・」

エヌレー「7世、油断大敵って言葉をしらねえのか!!」

7世「な・・・!?!」

ドカアーンッ

7世「ああーっ!!」

7世は真後ろから超高速で超大鎌で切り付けられ、大きく吹き飛ばされる・・・。

メタナイトの対談の結果行くこととなった7世。

そのころ、オゼットはエヌレーとともに「母を隠した人」や「コピー能力薬」などについて話していた。

それから45分後、7世は夢の泉の直前まで来ていた。

その時、突然オゼット達の襲撃にあい、クラッシュしてしまう。

7世自身は無事であった。

そしてそのまま戦いとなった。

はたして、7世の運命は・・・!?!?

第7話に続く!!

超短編外伝「鏡の国のその後」

星のカービィ ゼロの復讐劇Ⅴ GAIDEN 〱鏡の国のその後〱

ワドルディダークネスとの決戦から約9か月――

シャドーは鏡の国の再建を、少しずつだがやっている。

しかし、困難になりつつあった。

そこでシャドーが考え出した結論は、「ホロビタスターで再建」……である。

ダークメタナイト「馬鹿言ってんじゃねえぞ!!」

シャドーカービィ「いいのいいの。もうあの空間で再建はできない。だから「鏡の素」を星の体内に移植すれば、一瞬にして鏡の世界になって外からの侵入も「ゲート以外不可能」にできるんだよ?」
ダークメタナイト「うむう……。」

それからさらに数週間、結論はやつとまとまった。

シャドーカービィ「……というわけで結論は「ホロビタスター」ってなわけか。」

ダークデデデ「それでいいZOYO。」

ダークメタナイト「ふう……。んじゃあ再建開始と行きますか。」

それから3か月。ついに「鏡の素」と星の体内に埋め込むための装置が完成した!!

あとは埋め込むだけ。

シャドーカービィ「この「鏡の素」を埋め込めばホロビタスターは

一瞬にして「鏡の世界」になる・・・!!」

ダークメタナイト「プロジェクト発足から1年・・・きつかったなあ。」

ダークデデ「はぁ・・・つらかったZOYO。」

シャドーカービィ「んじゃ・・・装置に入れて。」

シャドーワポット「ワポ。」

シャドーワポットはボックスに入れてドアを閉め、レバーを引いて地価の奥深くまで落とす。

シャドーカービィ「これでいい。あと1分すればホロビタスターは生まれ変わり、ゲート侵入制の鏡の星に生まれ変わるのだーっ!!」

1分後――

・・・ゴゴゴゴゴ

シャドーカービィ「お、キタキタキタキタアーツ!!」

ダークメタナイト「よしっ!!」

その瞬間、地面に突然亀裂が入って白く光り、360度すべて真っ白に・・・。

その直後、視界が晴れる。

ダークデデ「・・・ふう・・・やっと晴れたZOYO。」

シャドーカービィ「おお、おおーっ!!これはすごい!!」

目の前に広がっていた世界はまさに元の鏡の世界そのものだった。シャドーは徐々に鏡の世界が見れて、目に涙が浮かぶ。

シャドーカービィ「うおお、我がこきよおおーっ!!」

ダークメタナイト「シャドー……。」

ダークメタナイトはそんなシャドーの姿を見てうれしく思った。

ダークメタナイト「これが、成功の証——」

シャドーカービィ「メタナイト!!」

ダークメタナイト「わかつてる。まだ再建はこれから……だろ？」
シャドーカービィ「住民はまだ無の空間に閉じこもっているはずだ・
……。何としてでも救出し、本格的に再建を開始するのだ!!」
みんな「おぉーっ!!」

こうしてシャドーら数十人らは鏡のゲートを作り、無の空間へと向かうのであった。

そしてちょうどこの日、カービィ達がいるポップスターで、星をめぐる恐ろしい戦いに巻き込まれているとは、彼らは全く知らなかった。

そんな中、彼ら「鏡の国の住人」は今、再建のために再び歩く——

IV GAIDEN 〵鏡の国のその後〵

完!!

第7話「夢の泉の運命」(Destiny)」

「前回のあらすじ」

リック「さあさあさあ、やってきましたぜ！？おれたちのコーナー・・。」

クー「とかいうな。元々デデラのコーナーなんだし。あくまでも俺たちは臨時だ。」

リック「そんなぁ・・。」

クー「んま、そう気にするな。んじゃ、早速やるぞ。」

リック「あ、ああ。」

リック「ええつと、前回メタナイトとの話し合いで7世が夢の泉に行くことになった。そのころあの2人組は夢の泉で、デデデ城から奪った「コピー能力薬」をあさっていた。その45分後、7世がやってきて、んで突然襲撃にあってクラッシュ。とりあえず無事だったものの、あいつら2人組と対決することとなる・・。」

クー「さすがだ、リック。やっぱりおれの・・。」

リック「とかいうな。これはカインがいての話だ。」

クー「・・。そうだな。そういえばマインさんもいつしよに・・。」

「

リック「たぶん。」

クー「・・。・・。」

エヌレー「7世、油断大敵って言葉をしらねえのか！！」

7世「な・・。！？」

ドカァーンッ

7世「ああーっ！！」

7世は真後ろから超高速で超大鎌で切り付けられ、大きく吹き飛ば

される・・・。

そのまま夢の樹にぶつかる。

7世「いまのうちに変なまねはやめとけよ・・・？」

オゼット「やめたほうがいいのはティンクルさん、あなたのほうだよ？僕の母さんを隠すなんて、趣味が悪いこと。」

7世「隠す？そんな覚えは一切ないな。」

エヌレー「オゼットよお、叩き潰すか？」

オゼット「いや、あいつは母さんの重要なことを知っている。でもこらしめなくちゃ。自分は関係ないって顔してるしね！！！」

ドカアーンッ！！

オゼットは腕から氷の塊を出した！！

7世は槍ですぐに防ぎ、超高速でエヌレーに向かって槍を下に突き刺す。

エヌレーはそのままよけて樹を駆け上り、上から迫る。

それと同時にオゼットも前から迫ってくる。

その瞬間・・・

7世「私の武器は、これだけではないぞ。」

7世は左腕から前方後円墳のような形をした大きなシールドが出現した！

その名前は「ディフェンダー」。

7世はそれにもともと備え付けられていたディスクカッターをオゼットに投げつける。

オゼットは上によけるが上に待機させた槍を一気に落とし、オゼットを追い詰める。

とその時、エヌレーが音速の速さで槍を横にたたきどけた！！

エヌレー「オゼットに手出しはすんじゃねえーっ!!」

そのまま超大鎌を7世むきにたたきつけようとした。

次の瞬間、7世はディフェンダーから槍を「11本」だしたのだ!!
現在ある槍は14+11=25・・・現在25本使用していることになる。

7世はその11本の槍を思いっきり勢いよく投げ、さらにエヌレーがよけたところをディスクカッター2枚で上下挟み撃ちにした。
その間にやってきたオゼットも槍8本で足止めさせた。

エヌレーはその2枚もなんとかよけ、そのまま木の枝の上に留まる。
7世はその留まった木を根元からバッサリディスクカッターで切り倒した!!

エヌレーがあわててほかの樹に飛び去ろうとしたところを槍で攻めた。

エヌレー「なんだよ、この槍は!!しつけえんだよお!!」

エヌレーはよけてそのまま地面に着地、木の根もとをうろろろして引き続き槍をよける。

7世は今度、オゼットに目を向けてオゼット中心の攻撃を始める。

7世は槍を飛ばさず、直接槍2本持つてオゼットに降りかかる。

カアンツ!!

オゼット「母さん返してよ・・・。」

7世「そんなの、知らないな。」

7世は、オールノブレードで戦うオゼットの腕にディフェンダーをたたきつけ、さらにその腕を槍で突きさした。

オゼットは痛がりながらも一步後ろに下がり、そのまま空中に飛ぶ。7世も空中に飛ぼうとしたが、飛ぶ寸前、目の前に突然ヒュツとあいつが視界に入った。

エヌレー「オゼットにさわるな・・・！」

7世「・・・！？」

エヌレーは超大鎌を2つにし、連続で切り付け、最後の一発で7世を吹き飛ばした！！

7世は吹き飛ばされた瞬間にディスクカッターを4枚飛ばし、エヌレーの足をけがさせた。

7世はそのまま樹にぶつかる。

バーンッ

7世「くっ。」

7世は、今いつの間にか真上にいるオゼットを槍で追い詰めた。

オゼットは「7世の予想通り」下によけた。

7世は真上に飛び、そのままディスクカッターで切り裂こうとした。次の瞬間、また目の前にエヌレーが現れた。

7世はディスクカッターで攻撃せず、手に持っていた2本の槍で勢いよく顔突きさした。

グサァーッ

エヌレー「あぎゃあーっ！！」

エヌレーはそのまま真つ逆さまに落ちる。

このとき、隙を作っていたためオゼットに・・・

オゼット「注意欠陥者はっけーん！！」

ドガァーンッ！！！！

7世「あああーっ！！」

オゼットは電磁砲を放って7世の回到直接強力なものを浴びせた！！

7世はそのまま落ちて地面に激突。

地面に激突した7世に上からオゼットが襲いかかる。

7世はディフェンダーで防御し、槍を呼び寄せる。

オゼットはそれに早く気づいて斜めによけ、光のブーメランを投げる。

7世はまたディフェンダーで防いでオゼットを追う。

その時、またしてもエヌレーが目の前に……。

7世はエヌレーの腹を突きさして、そのまま地面に落とす。

エヌレーは地面に激突する直前、超大鎌を2つともブーメランのように投げた！！

そのまま7世の横腹に直撃、7世はそのまま落ちる。

7世が落ちる途中、オゼットが上から高速で落ちてきて真横にきた！！

そして……

オゼット「フッフ、たゝのしゝね」

7世「な……！！？」

バァァーンッ！！

オゼットはなんとあの「ミニメテオ」を発動させて7世の腹に直接攻撃したのだ！！

もちろん「ミニメテオ」や少し前に発動した「電磁砲」などは全て「コピー能力薬」によるもの。

7世は勢い良くななめ向きに飛ばされて激突する。

ドッキヤアーンッ

7世「ぐ……。ぐう……。」

7世は横を見る。

その視線の先にあつたのは……。

7世「夢の……。泉……。!」

7世のすぐ横にあつたのは、なんとあの夢の発生源「夢の泉」であつた!!

そそ手そのすぐ近くにいたのは、スピン達であつた。

スピン「あ、7世殿でチュよーっ!」

ストロン「わ、ホントだもーっ!」

7世「あ、あいつらは……。」

そつつばやいた瞬間、オゼットは光のブーメランをスピン達に投げ
て脅す。

ドッキヤアーンッ

オゼット「君たちは口を閉じてね。」

ストロン「も、もーっ!」

7世「なにをする!」

オゼット「この作戦を成功させるにはどうしても「恐怖心と怨念」
の力がほしいんだ。」

7世「は……。!」

7世は、自分に「恨みの心」が芽生えているのに今頃気付いた。

エヌレー「オゼットよお。」

オゼット「ああ。エネルギー回収!!」

オゼットは「怖い心」「悲しい心」「恨みの心」「絶望の心」を吸収し始めた。

7世やスピンの体から急に力がなくなり、黒いエネルギーがどんどんオゼットの手のひらに集まる・・・。
そしてすべて回収し終えた・・・。

7世「う・・・ああ・・・。」
バタッ

7世は力がなくなって倒れた。

7世（このままじゃ・・・夢の泉が・・・!!）

そう思っているにも体に力が入らなかった。

そしてついにはならない出来事が起こった。

オゼットは先ほど集めたエネルギーの結集体「エネルギー球」をスターロッドの「星部分」にぶつけたのだ!!

その瞬間、星部分が赤く光りだし、水の動きが止まった。

それとともにスターロッドから大量の赤い雲が真上に飛んでいく・・・。

その赤い雲は空の白い雲を打ち消し、ポップスターを飲み込んでいく・・・。

そして、その赤い雲から血の雨が降ってきた。

ザアアアア・・・

オゼット「命の流れは止まり、生命は滅亡への道を走り始めた。」
残りあと4時間で全生物は星に帰るのだ・・・。」

エヌレー「やったなあ!!」

オゼット「ふふ」

7世「う・・・!!」

7世は絶望した。

結果がこんなことになるなんて・・・すべて自分のせいだ――

7世は自分を責めた。

とその時、ピンク色のマントが空から降ってきて、そのまま2人組に突進した!!

ボアアーンツ

オゼット「うあ、なにをするうー!!」

エヌレー「なんだこれ!? うわ、しっこ、ぎゃあーっ!!」

そのピンクのマントは7世のもとへと向かい、ボール状になって着地する。

そのマントの中から現れたのは・・・

7世「ギヤラクティック・・・ナイト師匠・・・!!」
ギヤラクティックナイト「大丈夫か？」

7世の目の前に現れたのはあの「ギヤラクティックナイト」だったのだ!!

エヌレー「このやろーっ!!」

???「パラソルダイブ!!」

エヌレー「うがぁーっ!!」

エヌレーの顔に直撃してそのままぶっ倒れ、突然現れたそいつは7世のもとへと行く。

7世「ワドルディ・・・なのか・・・？」

パラウド「パラソルワドルディ、ただ今ここに参上ッス！！」

7世は、「オゼット」「エヌレー」両者を相手に壮絶な死闘を繰り広げていた。

死闘の末に7世は「恨みのエネルギー」を吸い取られて倒れる。

オゼットはそれらの力で生命の流れを止め、さらに「赤い雲」を発生させて「血の雨」を降らせ始めた。

7世が絶望していたその時、「ギヤラクティクナイト」「パラソルワドルディ」が目の前に現れる。

果たして、彼らは一体どのような展開を迎えるのだろうか・・・！？

第8話に続く！！

第8話「母さんの正体」

「前回のあらすじ」

パラワド「やっと戻ってまいりましたッス!!」

ギヤラクティックナイト「メタナイトは今どうしてるんだろう?」

パラワド「ティンクル城で治療中と聞ってるッスけど。」

ギヤラクティックナイト「治療中? 誰から受けた怪我なのか?」

パラワド「怪我というわけじゃなくて、今流行ってる「生命帰化磁力」の影響ッス。」

ギヤラクティックナイト「それは誰よりも詳しく知っている。」

パラワド「ええっ!? それなら今すぐ教えてくれッスよ!!」

ギヤラクティックナイト「それはまた小説内で。」

パラワド「意外とケチッスね。」

ギヤラクティックナイト「年をとるとそんなもんだ。」

パラワド「んじゃ、そろそろあらすじを・・・」

ギヤラクティックナイト「おまえがやればいい。忘れたからわからない。」

パラワド「(ええええ・・・) ん、んじゃあやらせていただくッス。」

パラワド「前回7世さんはオゼット達2人と対決して、死闘の末に敗北したッス。んでそのまま夢の泉に「マイナスの感情」が含まれたエネルギー球が投入されて、赤い雲が・・・オゼット達はどうしても喜んでた様子。そのとき、ギヤラクティックナイト様たちが参上したッス・・・」

ギヤラクティックナイト「・・・で、いつ本編に入る?」

パラワド「あらすじに対する興味全くなしッスね・・・」

ギヤラクティックナイト「大丈夫か?」

7世の目の前に現れたのはあの「ギャラクティックナイト」だったのだ――！

エヌレー「このやろおーっ――！」

???「パラソルダイブ――！」

エヌレー「うがぁーっ――！」

エヌレーの顔に直撃してそのままぶっ倒れ、突然現れたそいつは7世のもとへと行く。

7世「ワドルディ・・・なのか・・・？」

パラウド「パラソルワドルディ、ただ今ここに参上ッス――！」

こうして7世の目の前に2人の救世主が現れた。

オゼット「くっ・・・。」

エヌレー「こいつら、たしか・・・――！」

それから10分後――

オゼット達はその場からいつの間にかいなくなり、残ったのは3人だけであった。

スピンは再び彼らにさらわれた・・・。

彼ら3人は血の雨が激しく降る中、いろいろな会話を交わす。

ザアアアア・・・

7世「・・・この調子じゃ何一つ救えないだろう・・・。」

パラウド「そう落ち込まないでくれッスよ、7世さん――！」

パラウドは7世の背中をたたく。

7世「そうだな・・・。ところで聞きたいことがあるが、ギヤラクティックナイト師匠、何が始まるうとしてるんだ・・・？」

ギヤラクティックナイト「ギヤラクティカでいいといったはずだ。」

7世「師匠がそう言っても困る。さっきの質問・・・」

ギヤラクティックナイト「私は2年前に連邦に行つて、それ以降ずっとこの場所に居ついている。」

ギヤラクティックナイト「ある日、彼らがここに突然きた。その3ヶ月間、彼らを監視し続けた。」

ギヤラクティックナイトは7世の前に立ち、7世の肩に手を添える。その瞬間、7世の方からまたあの粉が・・・。

シュウウウー・・・

7世「・・・触らないでくれ。」

ギヤラクティックナイト「この現象はあの磁力を「信号」として受け取った細胞が異常反応を起こすのが原因だ。その結果細胞が粉となつて落ちる。」

7世「・・・。」

7世はそれどころではなかった。自分のこの症状にいらだちを感じていた。

彼は自分自身に失望していた。

7世「・・・師匠はいつも詳しいな・・・。」

ギヤラクティックナイト「そこで1つ。実はその3ヶ月間の間、カインとマインが運ばれてきた。」

7世「カインらが・・・？」

7世は一瞬胸が圧迫された。

ギヤラクティックナイト「とてもひどい状態でな、拷問を受けたらしい……。」

7世「拷問……（まさかキラメキマウンテンでの……）。」

ギヤラクティックナイト「ホワイティマターの液状細胞の一部を手に入れたのは知っているだろう？」

7世「ああ、知っている。」

実は、ダークマター族には2種類いる。男が黒、女が白だ。（ただしゼロ等は例外）

ギヤラクティックナイト「ホワイティマター……。あれは恐ろしかった。今から3200年前、私がまだ若かりし頃。空が赤くなり、空の裂け目から突然降臨した。ポップスターは壊滅寸前の状態でいたがやつとのことで倒し、液状化することができた。」

パラウド「ギヤラクティックナイト様って長生きなんスね!!」

ギヤラクティックナイト「いや、実際のところそんなに長生きはしてない。その出来事の直後に私は死んだんだからな。」

パラウド「ええっ!？」

パラウドはとっても仰天していた様子。

ギヤラクティックナイト「この話はあとで。では話を戻す。実はそのホワイティマターはゼロの妻だったそうだ。生前はダークマター族のナンバー2として働いていたな。」

7世「あの2人組が言っている「母さん」はそのホワイティマターのこと……というわけか。」

ギヤラクティックナイト「必然的にそうなるだろう。」

ギヤラクティックナイトは手のひらを広げ、血の雨をためる。

ギヤラクティックナイト「彼らの目的は3つ。全生命の絶滅と。
パラワド「星の破壊と。」

7世「・・・零式の復活・・・か。やはりな・・・。」

7世は動揺した。

それを追い詰めるかのように一言言い放った。

ギヤラクティックナイト「あの2人組はその気になればホワイティ
マターの細胞を介して零式の肉体を再構成することができる。」

7世「あいつらが求めているのはそのため・・・だろう?」

ギヤラクティックナイト「おそらく。」

ギヤラクティックナイトは空を見上げ、一つの言葉をつぶやく。

ギヤラクティックナイト「私の体もこの雨で溶けて果てるのか。」

7世「・・・?」

ギヤラクティックナイト「この雨は生命活動を停止させる雨。おそらく
邪魔者を1人残らず消すためだと思われるが・・・。」

7世「残り4時間と言っていたが・・・。」

7世(どうしてだ・・・?どうして私は止められなかった・・・?)

7世は悔やんだ。どうしてあの時――

その時、360度すべてが真っ白になる。

そして7世の後ろにはあの人の姿が・・・。

???「私の息子の前でそんな姿見せたら情けないぞ。」

7世「兄さん・・・。」

7世の後ろには、カービィの父の「6世」の姿があった。

6世「そんなにズルズル引きずっていいものか・・・？ザンのしたことを無にするのか？」

7世「・・・。」

その瞬間、目の前はもとの世界へ。

7世「・・・罪つて・・・許されるのか？」

ギヤラクティックナイト「試したことはない。」

7世「試す・・・？試す・・・試す・・・試す・・・。」

7世は何度も繰り返しつづやく。

7世「・・・わかった、試してみよう。」

ギヤラクティックナイト「・・・うむ・・・。」

7世は背を向け、ゆつくりと歩く。赤き雨の中・・・。

パラウド「僕もついで行くッスよー!!」

パラウドも7世のあとをついていく。

7世「んじゃ、いくか・・・。」

ギヤラクティックナイト「・・・。」

ギヤラクティックナイトは7世とパラウドを最後まで見守った。

ギヤラクティックナイト「・・・急げ・・・。もう始まったんだ・・・。

」。

そのころ、あいつは……。

「ププタウン」

あいつは「ワドルディダークネス記念碑」という翼状の記念碑の前にいた。

エヌレー「……そろそろか。」

エヌレーは手をゆっくりあげ、^{のひら}掌を開いた。

その瞬間、地面から有翼の闇生物「ダークエント」が無数に出現し、町のみんなを襲った！！

ダークエント「ぐおおああーっ！！」

あるものは飛び立ち、あるものは走り、あるものは光を放ち……。それぞれがそれぞれのやり方で町人を襲っていく。

町人の命はどんどん失っていく……。そんな中エヌレーは――

エヌレー「よおし……。」

エヌレーは記念碑に手を当て、攻撃をしようとした。
とその時、エヌレーの後ろからあの2人が……。

リック「そこでなにしてた？見るからにして怪しそうだが？」

あのリックとクーが後ろで堂々と構えていた。

エヌレー「ここに埋めたんだろ？」

クー「なにを？」

エヌレー「ええっと、なんかな、これ、このタワーに母を隠したんだろ？」

リックとクーはお互い顔を見る。

リック「そんなの聞かされていないから知らないね。」

リックとクーは再びお互いの顔を見て、クスクス笑う。

エヌレー「ふん、やっぱりどこかに隠してるんだな？」

リック「な．．．おい、ちょ、クー、なんか、おい！！！」

クー「．．．。」

リック「クー！！おい、おい．．．くそ、うりゃーっ！！！」

リックとクーはエヌレーに勢い良く襲いかかる。

ギヤラクティックナイトとの会話を雨のなか続けていた7世。
その中で新たに分かった事実。

生命帰化磁力によって緑の粉が出る理由。

ホワイティマターの存在。

零式の復活。

オゼットの本当の目的。

赤い雨こと。

そのころエヌレーはワドルディダークネス記念日の前であることを
たくらんでいた。

そんなとき、リックとクーがやってくる．．．。

はたして・・・？

第9話に続く！！

第8話「母さんの正体」(後書き)

こんにちわ、零物質です。

文章中に「ザン」というのが出てきましたよね？

読まれた方はおそらく疑問に思われるかと思います。

この「ザン」という人に関する詳しいお話は「II-2」でまたやりますんで。

あ、今「II-2」ってない？」って思いませんでしたか？
その詳しい話はまた後日で。それでは。

第9話「大王×オゼット」

「前回のあらすじ」

ギヤラクティックナイト「・・・久し振り・・・だな。」

パラウド「約2、3週間休んでたんすよね？」

ギヤラクティックナイト「いろいろと事情があったらしい・・・。」

パラウド「へえ・・・。」

ギヤラクティックナイト「・・・で、いつやるんだ、あらすじ。」

パラウド「あ、そうツスね。そうでしたツスね。」

パラウド「ええっと・・・前回ギヤラクティックナイトと対談した7世は自分の知っている情報以外のものを得る。「生命帰化磁力による体の影響の原因」「本当の目的」「赤い雨」そして「零式の復活」。はたして・・・？」

ギヤラクティックナイト「・・・。」

パラウド「・・・ええっと・・・。」

7世はパラウドをおぶって音速で走り、40分後にティンクル城にたどり着いた。

7世はカギを開け、門を開ける。

そのまま玄関に向かい、ドアノブをつかんだがカギがしまっていた。

7世はカギを1つ開けたがまだ閉まっていた。

7世は2つ目、3つ目のカギを開け、やっとのことでドアを開ける。

7世「・・・リック達はどうやらいったようだな。カギが全部閉まっている。」

パラウド「大丈夫なんすかね、みんな・・・。」

7世「さあ・・・。」

パラウド「カービー達は、今・・・。」

7世は上を見上げる。

7世「スピン達も誘拐され、オゼット達もこの通り赤い雨を降らした。急いでくれ、カービィ……。」
ザアアァー……

7世はドアを開け、第4応接室へと入る。

7世「んまあくつろげ。時間はないが……。」
パラワド「あ、はい……。」

7世はソファに座り、パラワドに語りかける。

7世「なあワドルデイ、大王は今どうしていると思う?」
パラワド「え、あ、そういえばまったく見てないッスね……。どうしているんスかね?」

7世「フグのことだ。ゴキブリ並みに生命力があるから生きてるに違いない。大王は今頃……。」

7世は天井を見る。

そのころ、「プププ防衛省本部ビル」の最上階で今エレベーターから出ようとしていたものらがいた……。

ガガガ……ガシャン
キィィィ……

オゼット「……。」
デデデ「……何の用だ、いったい。わしを拉致してまで何をやる……。」

オゼット「大王様、不安を消せないのかい?この星はあんたの態度

にかかっているんだからね？」

デデデ「ふん、くだらんZOY・・・!!」

オゼットとデデデはそのまま大きいベランダの柵の前に立つ。

オゼット「話を聞いてくれよ、大王様。」

デデデ「今更か？もう遅いZOY。それじゃあこの赤い雨はなんZOY。」

オゼット「生ある者達はいつもこうだ。原因を考えようとせず、誰も自分に関係ないって顔してる。ふざけてるよ。」

デデデ「・・・そんなに復活させたいのか？」

オゼット「復活？・・・誰を？」

デデデ「・・・お前も同類だな。」

デデデは近くにある椅子に座った。オゼットにも椅子に座るよう勧めるが断った。

オゼットは早速口を開く。

オゼット「・・・生物ってどうしてこんなに愚かなのかな？」

デデデ「全ての生物は「夢」ってやつに弱いんだZOY・・・。」

オゼット「夢・・・ねえ・・・。」

デデデ「全生物は古きものを切り捨て、新しきものに切り替えようとする・・・。新しきものを望む「夢」は全生物の共通の望みであり、最大の弱点でもあるんだZOY。」

オゼットはデデデの顔を一度確認し、また前を向く。

オゼット「僕たちが母さんを求めているのも夢なのかい？」

デデデ「それは現状の困難を超えようと努力しているだけで夢ではない。」

オゼット「へえ・・・困難？それって今のこのことを言っているの？」

デデデ「・・・。」

オゼット「だいたいこんなことになったのはあんたたちのせいなんだよ。」

デデデ「・・・それがどうした。」

オゼット「・・・あんたも苦手なんですよ、夢に。」

デデデ「いやあ、俺様の夢は違う・・・。俺様が望んでいるのは・・・平和だ・・・。」

2人は空を見上げる。赤い赤い空を・・・。

デデデは深く息を吐き、オゼットに語りかける。

デデデ「・・・おい、オゼット。」

オゼット「なんだい？」

デデデ「一つだけ聞いていいか？」

オゼット「ホントに一つでいいの？」

オゼットはなぜか苦笑いをしながら問う。

デデデ「7世から聞いた話なんだが・・・、あの細胞を手に入れて元通りになると言っていたそうだな。」

オゼット「それがどうしたって言うんだい？」

デデデ「元通りとはどういうことだ？」

オゼットはしばらく黙る。

オゼット「・・・彼が・・・来る・・・。」

そうついた瞬間、デデデの目にあいつの姿が映り、その姿がオゼッ

トと重なる。

デデデ「零式・・・悪夢だな。」

オゼット「・・・らしいね。」

デデデ「らしい？」

そっぴいとオゼットは全身が震えだした。

オゼット「僕は零式のことなんか全く知らない……。感じているだけなんだ。」

デデデ（知らない・・・？）

オゼット「ああ、イライラするよ。母さんは……。どっちを……。」

オゼットは悲しみと怒りに震えた。

デデデ「哀れ、思念体。ほんと泣けるZOY。」

オゼット「・・・！！黙れ！！どっちだろうとあんたたちの結末は同じだ！！」

オゼット「母さんは長き旅の末にはるばるやってきた。この星の存在が邪魔だったから！！」

オゼットは腕を振ってオールノブレードを出し、デデデの首元に突き付ける。

オゼットは再び前に向いて腕を広げる。

オゼット「母さんはこの星で最期を迎えたんだ。母さんは憎くてしょうがなかったに違いないよ。」

オゼット「だから僕が喜ばせてあげようって……。母さんのためなら、何でもやるよ？」

デデデ「ハハハ、悪夢再びか???そりゃあよかった。」

オゼット「あんたたちがいる限り、こんな面倒なことがいつまでもいつまでも続くのさ。」

オゼットは笑いながらそのように言い放つ。

デデデ「母さんだか零式だか何だか知らないが、何度でもことを起こせ。」

オゼット「く……。」

デデデ「俺たちは命を繋ぎ続ける限り何度でも阻止してみせるZOY。」

オゼット「そりゃあよかったよ。んじゃあ……。」

そういつた瞬間、オゼットの左腕からエメラルド色の小型カプセルが出現した。

デデデ「そ、それは・・・!?!」

オゼット「気づいたようだね。でも遅いよ、大王様。いったでしよ、態度次第つて。」

デデデ「何をするつもりZOY?」

オゼット「これ見てわからないの?ハハ、これが本当の「哀れ」だよ。」

オゼットはカプセルを振る。

デデデ「その中に、何があるのか分かっているんだろっな?それにそれは使用してはならん!!」

オゼット「焦り始めたようだね。もしかして・・・後悔しているの?」

デデデ「そんなのより、カプセルは一体いつ……。・・・!!!あ・

・・・あの時・・・。」

デデデは、ピンと来た。「城の崩壊時に盗まれた」と。

オゼット「全部わかったところで、そろそろ終わりにしようか。」

デデデ「やめろ、よせ!!」

シュウウウ・・・

オゼットは左腕にカプセルを埋め込んだ。

その時、腕から手の先にかけて猛烈な緑の光を発した!!

その影響で周辺が揺れる。

シュゴワアアーツ

デデデ「ぐっ・・・!!」

オゼット「悲しいねえ、自分の星が奪われるって!!!!僕と母さんのこの苦き思いを知れええーっ、フオオオッ!!」

ダアアアーンツ!!!

その時、赤い空に向かってオゼットがカプセルの中身すべてを放った!!

そしてそれは赤い雲の中へ・・・。

その瞬間、その赤い雲が突然渦巻き、大きい穴ができた。

その穴の周辺から青い雷が走り、地上に何発も落ちる。

町の一部は燃え、その炎は隣の家へ、また隣の家へ、と燃えうつる。

そして工場も爆発した。

ドカアアアーンツ!!!

空がうなり、大地は揺れ、人々はパニック状態だった。

そしてその穴から恐るべきやつが・・・。

ゴアアアアーツ!!!!

ゴゴゴゴゴ・・・

エメラルドロブスター「グゴガアアアーツ!!!ボアアアアア!!!」

そこに現れたのは、全身がエメラルドでできた「エメラルドロブスター」だった!!

エメロブとは…ヘビドロブスターの亜種。デカイ。デデデが開発した最終兵器。強さはヘビロブの222倍らしい。

エメラルドロブスターは大きな4つの翼を広げ、あの「ワドダク記念碑」のもとへ。

ゴオオオオオーツ!!

バーンッ!!

エメラルドロブスターは上から記念碑に乗って粉々に潰してしまっ
た!!

リックは突然空から飛翔してきたエメラルドロブスターに仰天した。

リック「うつひょお!!」

リックは声が裏返り、脳内で整理できない状況。

リック「こりやあもう・・・」

クー「無理っばいな。」

リック「逃げるぞおおーっ!!!!」

リックらは後ろに向き、全力ダッシュで逃げだす。

ティンクル城につき、応接室で少しの時間をくつろぐ2人。

そのころデデデとオゼットの2人は防衛省本部の最上階で会談をする。

会談の末、オゼットは「デデデの態度」を理由に、デデデ城の最終兵器「エメラルドロブスター」を空に放つ。

エメラルドロブスターの影響で町に様々な災害を引き起こした。

はたして、これからいったいどうなるのか・・・！？そして・・・。

第10話に続く！！

第10話「エヌレー、再び。」

「前回のあらすじ」

7世「まだまだ・・・」

パラワド「油断は・・・」

7世「できないようだな。」

パラワド「どうするんスカ、これから!!」

7世「何とかやってくれるはずだ。」

パラワド「ええつと・・・誰がツスカ？」

7世「いまの状況だと・・・カービィとメタナイトだろう。」

パラワド「・・・そうっぽいツスね。なんでか知りませんけど。」

7世「・・・で、あのデデデがなにをやらしたのだ？」

パラワド「態度が悪くて、それにあきれたオゼットさんがあの口ボを召還したそうツス。」

7世「んでその口ボがププタウンに降臨した・・・と。」

パラワド「・・・ありゃ!?!いつの間にかあらすじ言っちゃいましたツスね!!」

7世「気づいてもいなかったのか・・・。」

パラワド「こんなパターンであらすじするなんて初めてツス・・・」

「

7世「たまにはこんなのもいいだろう・・・。うむ・・・。」

パラワド「・・・で今カービィは？」

7世「・・・見に行ってくるか。」

リック「こりやあもう・・・」

クー「無理っぽいな。」

リック「逃げるぞおおーっ!!!!」

リックらは後ろに向き、全力ダッシュで逃げだす。

その時、エメラルドロブスターが空へと羽ばたき、上空50mほどのところで空中停止した。

そして、その場で「ある攻撃」のためのエネルギーを両バサミにため始めた！！

シュゴゴゴゴゴゴゴ・・・

リック「おい、後ろどうなってる！！」

クー「言わないでくれ・・・！！」

クーとリックは子供4人を両手や背中、胸に抱えてそのままダッシュした！！

クー「間に合うのか？」

リック「無理に決まってるだろうがああーっ！！」

ドッキヤアアアーンッ

リック&クー「ボアアーツ！！！！」

エヌレー「ホアッ！！」

ドウワアアアアア・・・

エメラルドロブスターはハサミから強烈な「プラストフレア」を放ち、周囲を熱線と爆風で包み込んだ。

半径110mの建物は全壊し、完璧な焼け野原となった・・・。

それから数十分・・・。

リックとクーはププタウン4丁目の大きい十路地のちょうど真ん中で倒れていた。

リック「う・・・。」

クー「ぐぐ・・・。」

エヌレー「楽しいなあ、お〜い♪」

リック達の目の前にはエヌレーの足が見えた。
リックとクーの2人はゆっくりと立ち上がる。

リック「クー・・・下がってる・・・。」

クー「あ・・・？」

リック「どりゃあーっ!!」

リックは「大片鎌」を2つ取り出し、襲う。

一方のエヌレーも「超大鎌」を取り出し、防御する。

リックは切りあう中で足をあげて蹴ろうとした。

だがその足に鎌でかけられ、そのまま後ろに後退。

その直後にエヌレーに両足で勢い良くけられ、吹き飛ばされる。

ドォンッ

リック「ごわっ!!」

エヌレー「母、返せよ。」

リック「ったく、何度もしつけえぞ!!」

リックは2つの大片鎌を勢いよく振るがジャンプしてよけられる。

エヌレーはジャンプしてそのまま住宅の上に降り立つ。

エヌレー「母を返してくれたらそれで終わりなんだが、返してくれねえからさ。な。」

リック「知るか!! ホワイティマターでどうする気だ!! 正気かよ!？」

ガン、カンカンカカ、キンキン

エヌレー「俺たちは母に会いたただけだああーっ!!」

ドォーンッ!!

リック「うおあああーっ!!」

リックは超大鎌で吹き飛ばされ、そのまま店看板に突っ込んだ!!
その真下にいたクーの頭に看板だのが降ってきた。

ダダダドオーン

クー「ああっ!!」

クーは頭を押さえて倒れこんだ。

その直後、今度はリックが降ってきた。

その勢いで足場が崩れてそのまま2人とも落下。
激しく地面に激突した。

その直後に笑いながらエヌレーが降り立つ。

エヌレー「ククククク・・・」

クー「ぐ、ううう・・・」

リック「たく・・・。・・・うお!?クー!?!」

クー「今すぐどいてくれ、痛い!!」

リックはすぐさま立ち上がって、そこからどく。

どうこうとしてリックが立った途端、今度はクーの手を踏んだ!!

クーは叫ぶがリックは全く気づいていない。

クー「こ、このやる・・・」

クーは手を押さえながらゆっくりと立つ。

リック「母とか母さんとか言ってたって、ただの液体じゃねえか。」

エヌレー「おい、母をそんな風に呼ぶんじゃないねえ!!許さんぞおおーっ!!」

クー「ううむ・・・悪かったな・・・」

リック「・・・って何勝手に謝ってんだ!!!」

リックはジャンプしてエヌレーの真上を飛んだ。

エヌレーは真上を見て構えに入る。

そのすきにクーが前方で羽根を何千枚に投げて刺し、その著釘に空にエヌレーをはたいた。

上に飛ばされたエヌレーはそのままリックに「1秒パンチ1500連発」をされた。

それを4秒間やられて、最後の1発で腹にパンチ、そのまま真下に落ちた。

エヌレー「貴様・・・!!」

ドカアアーンッ!!

スタッ

リックとクーはお互いの顔を確認し、微笑^{ほほえ}みを交わす。

とその時、エヌレーが突然リックの視界に入った!!

リックのはらにあの鎌が直撃して吹き飛ばされ、その後ろにいたクーも巻き込まれ、そのまま壁に2人とも激突。

エヌレーは超大鎌を持って降り立ち、リックとクーに近づく。

エヌレー「ふふふふ・・・」

クー「く・・・」

リック「ぐおお・・・」

クーとリック、大ピンチ!!

そのころ、あのププタウンは・・・

エメラルドロブスター「ごあああーっ!!!」

エメラルドロブスターは、かつて記念碑のあった場所に立ち、大きい
いうなり声をあげた。

それを目の前にした7世とパラウドは絶句した。

7世「・・・。」

パラウド「・・・こいつ・・・ッスよね？さっきの・・・。」

7世「おそらく・・・。」

パラウド「・・・一回・・・近づいてみるッスか・・・？」

7世「・・・。」

パラウドはゆっくりと近づく。

それに反応したエメラルドロブスターがギロリとにらむ。

それに敏感に反応したパラウドはとっさに逃げて7世の後ろに回る。

7世はあきれ、そして槍を地面から14本取り出す。

7世「ワドルデイ、心に勇気が存在しないのか？」

パラウド「だつてえ・・・。」

7世「ならば私が先に・・・。」

7世は14本の槍とともにエメラルドロブスターに向かう。

とそのとき、目の前に突然誰かの影が・・・。

バサッ

7世「ぬ・・・！？・・・！！師匠・・・！？」

ギヤラクティクナイト「大丈夫か？カービィはちゃんとしている
だろうな？」

7世「ああ。さっき確認した。」

ギヤラクティクナイトはランスの代わりに「ガンランス（銃装備

Ver.」を持っていた。

ギャラクティクナイトはななめに構え、エメラルドロブスターに発車する。

銃声とそれをはじき返すエメラルドの音が響き渡る。

ダダダダッ

カカカカンッ

エメラルドロブスター「グオアアアアア!!」

エメラルドロブスターはそれをうつとおしく思ったのか、空へと再び羽ばたき始めた。

その時、横から突然青いマントが飛んできた。

そのマントから黄色の光が放ち、エメラルドロブスターの目に襲いかかった。

そのまましつこく切ることを続けるがエメラルドロブスターに振り払われる。

そのマントの正体は・・・

???「遅くなったな。」

パラウド「メタナイト・・・!!え、包帯右腕・・・。」

メタナイト「しばらくは、左腕のようだ・・・。慣れないようだな・・・。」

メタナイト「ワドルデイ、私の背中に乗れ。」

パラウド「え?」

メタナイト「早く。」

パラウド「あ、はい・・・。」

パラウドは顔がこわばった状態でメタナイトの背中に乗る。

そうしているうちにギャラクティクナイトはガンランスの「ガン」で対抗する。

ギャラクティックナイトは、銃口に「烈撃弾^{れつげきだん}」のエネルギーをため始めた。

だがその間にあのエメラルドロブスターがギャラクティックナイトに襲いかかる!!

エメラルドロブスターは両バサミにエネルギーを集め始め、ギャラクティックナイトの目に血が走る。

その瞬間、エメラルドロブスターの右ハサミに大きい手裏剣がぶつかった!!

手裏剣がブーメランのように返っていく。

その先には・・・

???「ふう、何とか成功したでチュね。」

7世「スピン、ストロン、ドク!!」

7世はびっくりした。いつどこからどうやってやってきたのか――

とりあえず安心した7世。

そして――

???「カービィはまだ部屋にいる。」

7世「ドロツチェ・・・!! あんた大丈夫なのか?」

ドロツチェ「心配はいらん。その前に上。」

7世「・・・?」

7世は上を見る。そこには飛空艇があった。

エメラルドロブスターがもたらした災害。

それらはリックらやプタウンの住民たちに多大な影響を与えた。

それから数十分、リックとクーは目覚め、突然エヌレーとの戦闘

が始まる。

この戦闘の行方とは・・・？

そしてププタウン。ここではエメラルドロブスターが暴れていた。そんなときにいっぱい仲間が集まった。

ギャラクティックナイト、メタナイト、スピン、ストロン、ドク、

ドロツチエ――

はたして・・・？

第11話に続く！！

第11話「召喚巨獣の脅威 前編」

「前回のあらすじ」

パラワド「すんごく久しぶりッスね!!」

7世「いろいろと諸事情があつてな・・・。」

パラワド「復活・・・というわけッスね?」

7世「いや、まだわからない。」

パラワド「なぜッスか?」

7世「とにかくこれからは不定期更新だ。いつ更新できるか予測すらつかない。」

パラワド「とにかく早くあらすじを・・・。」

7世「そうだな・・・うむ。」

パラワド「前回、ついに「エメラルドロブスター」がププタウンにすごい被害をもたらしたッス!!んで目覚めたリック達の目の前にはなんとエヌレーがいたんスよ!!んでいろいろあつて戦つて・・・。いっぽうの僕らは目の前にエメラルドロブスターがいて・・・。と
その時、次々と仲間たちが駆けつけてくれたッス!!しかもドロツ
チエまでやつてきて・・・。」

7世「大体そんなもんだな。」

パラワド「んじゃ、そういうわけで2カ月ぶりのお話をどうぞッス
!!」

そして――

???「カービィはまだ部屋にいる。」

7世「ドロツチエ・・・!!あんた大丈夫なのか?」

ドロツチエ「心配はいらん。その前に上。」

7世「・・・?」

7世は上を見る。そこには飛空艇があった。

7世「ドロツチエ、あれはなんだ・・・？」

ドロツチエ「新型の「キオク」だ。あとで乗せてあげよう。ふおっ
！！」

ドロツチエはそのまま走ってエメラルドロブスターのもとへと行く。
7世もそのあとについて走って行こうとするが、例の「あれ」が地面が出現した・・・。

シュオオー

ダークエント「グアアアッ！！」

7世「・・・何だこいつらは！！」

ダークエント・・・第8話を参照

なんとあのダークエントが4匹も出現したのだ！！

7世は14本の槍を取り出した。

7世は14本の槍でそれぞれの首や腹に突き刺しまくる。

スシャズシャズシャツ

7世「くそ、これでも・・・ぐ、しつ、こい！！」

グシャズサツ

その時、その4体のダークエントが突然黒い煙となって上へと舞い上がった！！

ゴアアア・・・

7世「あああ・・・」

その煙は再びダークエントとなり、上から襲いかかる！！

ダークエント「アアアア！！」

7世「くっ……」

そして次の瞬間、真上にあの「光の剣」が飛んできた！！

その光の剣はダークエントを一瞬にして消滅させ、ブーメランのように誰かのもとへと帰っていく。

その「誰か」とは――

マスターカービィ「……遅くなって悪かった……。大丈夫だった？」

7世「カー……ビィ……？あ、ああ……。一応大丈夫だ。お前の体大丈夫か？？」

マスターカービィ「これぐらいの痛みは……。大丈夫……。さ、いくよ。」

7世「あ、ああ……。」

2人は、空で飛び回っている「エメラルドロブスター」を見つめながら走っていった。

一方、今戦っている現場は……

バーン、ババーン

ギャラクティクナイト「ぐ、ふぬおおっ……！！」

ギャラクティクナイトは鉄塔の上で「ガンランス」を撃ちまくっていた。

命中はしているもののそれほどのダメージはないようだ。

そうしている時に、エメラルドロブスターがギャラクティックナイトに突進した！！

エメラルドロブスター「オアアーツ！！」

ギャラクティックナイト「ぬぐあああつ！！」

ズガアーンッ

ギャラクティックナイトはそのまま吹き飛ばされた。

吹き飛ばされたギャラクティックナイトはビルから突き出ていたガレキにつかまった。

ガシッ

ギャラクティックナイト「・・・。」

そのギャラクティックナイトの目の前で、赤いマントのあのネズミが跳んでいた。

ドロツチェ「よし・・・。ふっ！！」

ドロツチェは鉄塔の上やビルの最上階を転々と跳びながら「トリプルスター」で撃つ。

その攻撃の途中、さらに上空から「ある人」がエメラルドロブスターの背中に飛び乗った！！

7世「よおし、ふっ！！」

7世はエメラルドロブスターの背中に10本刺した！！
残った4本は両手に持ってグサグサとどんどん刺す。

エメラルドロブスター「グノアアア！！」

刺された状態でもまだ飛び続ける。

そんな中横からはまだトリプルスターでどんどん撃ち続けていた。そしていま、垂直の壁を登っているやつが約一名……。

タッタッタッタ

スピ「ドロッチェ様、今行くつチュよ!!」

スピンはそのまま壁をけって飛び、エメラルドロブスターの目を集中的にあの「巨大手裏剣」で攻撃した!!

そして真横からドロッチェのトリプルスターの「星2つ」がエメラルドロブスターの目に命中した!!

ズシャーンツ

エメラルドロブスター「ウゴオオオーツ!!」

スピンは横に倒れていた鉄柱に着地した。

だがその直後、目の前でエメラルドロブスターがハサミにエネルギーをため始めた!!

シュオオオオ……

スピ「え……!!?」

誰もが驚いたその場面であいつが……

7世「勝手に動いちゃ困るよ、と!!ふおっ!!」

7世は一度すべての槍を抜いて、超能力で一斉に14本の槍を頭に刺した!!

ズシャアアーツ!!

エメラルドロブスター「グガアアーツ!!」

その衝撃でエメラルドロブスターの攻撃は上に発射され、当たったビルが一気に崩れおちた!!

実はその真下にギャラクティクナイトが・・・!!

ゴゴゴゴゴ・・・

ギャラクティクナイト「・・・!？」

そんなピンチの時、タイミングよくあの「ピンク玉」が飛んできた
!!

ガシッ!!

ギャラクティクナイト「うおおっ!!・・・カービィ・・・
?」

カービィはギャラクティクナイトを片手に別のビルのでっぺんま
で跳んだ。

スタッ

ギャラクティクナイト「カービィ・・・!!」

マスターカービィ「気にしないでいいよ・・・。。・・・では、
行ってきます!!」

カービィはビルから飛び降り、エメラルドロブスターへと向かう!!

カービィが上から降りてきているのを見たみんなは、横倒れになっ
ていた鉄柱の上へと移動した。

スタッ

7世「カービィ……。」

メタナイト「……。」

パラワード「お……!!」

ついにカービィの戦いが始まる……!!

カービィはエメラルドロブスターのハサミをよけ、もう片方のハサミも剣で受け止める。

剣とハサミのガチンコ対決。斬っては防ぎ、叩いてはまた防ぎ……。

そしてカービィはハサミを払いのけてエメラルドロブスターの顔の前にきた!!

カービィは左目を集中的に斬りたぐる。

エメラルドロブスターはジタバタと空で暴れる。

だがカービィが斬っている途中に剣をハサミでつかまれ、そのまま飛ばされた。

振り飛ばされたカービィは、近くにあった鉄塔にマスターソードを刺し、その上に立った。

ザッ

マスターカービィ「……。正面からじゃられるだけだ……。・。よし……。」

カービィは足元に刺しているマスターソードに足で念を念じた。

とその時マスターソードが光りだし、なんと「2つ」になったのだ!!

この2つ……実は過去にも登場している。（過去の作品を見ていれば知っているはず）

ひとつが「ライトニングマスターソード」もうひとつが「ダークネスマスターソード」である。

カービィはその2つのマスターソードを持ってエメラルドロブスターの頭の上に到達した。

カービィは頭の上で斬りまくり刺しまくり。

エメラルドロブスターの頭はついに陥没。傷も深くなっていく。シヨートもし始めた。

そこにエメラルドロブスターの両バサミが！！

だがカービィは2つのマスターソードで受け止め、そのまま両バサミをマスターソードで刺した！

そのマスターソードで刺したまま今度はハサミで頭を叩き始めた！！エメラルドロブスターの頭がひどく損傷し、コードなども飛び出し始めた。

そしてカービィはマスターソードで刺したハサミのうちの右バサミをスライスし始めた！！

それでついに右バサミは真つ二つに！！

んで肩の根元から右バサミどころか右腕まで完全にそぎ落とした！！

ジャキイーンッ

エメラルドロブスター「グガアアアッ！！！！」

マスターカービィ「……。」

カービィは剣を2つから「1つ」にし、エネルギーをため始めた。

そしてそのエネルギーを一気に「左目」に向かって、放出しながら勢い良く斬った！！

エメラルドロブスターの左目は完全にぶっ壊れ、その勢いで真つ逆さまに落ちた。

エメラルドロブスター「ギギヤアアアアア！！！！」

ゴアアアッ
ドッキヤアーンッ!!

落ちた衝撃でエメラルドロブスターの背中 of 装甲はほとんど剥がれ落ちた。

エメラルドロブスターが落ちた勢いで、周辺にあるたくさんのビルが瞬く間に崩れ落ちた。

エメラルドロブスターを目の前にした一行。

そんな中7世がピンチになる。その時、カービイが戻ってきたのだ

!!

カービイは7世を救い、エメラルドロブスターのもとへと向かう。

そのころドロツチエ達は懸命に闘っていた。

それぞれがそれぞれの場所でそれぞれの部位にそれぞれ攻撃を仕掛ける。

しかしダメージはいずれも少ない。

そんな中、7世が空から降ってきてエメラルドロブスターにダメージを与えた。

その間にカービイもやってきた。

そして、ついにカービイがエメラルドロブスターを迎え撃つ!!
はたして、この戦いの行方は・・・!?

第12話に続く!!

第11話「召喚巨獣の脅威 前編」（後書き）

今まで執筆してなくてすいませんでした。いろいろと諸事情があって執筆する暇すらなかったんで・・・。

とりあえず今日から「不定期更新」という形で小説を更新させてもらいます。

んで今後の予定は？と言いますと・・・。

星のカービィ	ゼロの復讐劇Ⅴ	11月末連載終了予定	
星のカービィ	ゼロの復讐劇Ⅱ-2	12月公開予定	短編小説
星のカービィ	ゼロの復讐劇外伝	未定（1～3月頃？）	
星のカービィ	ゼロの復讐劇Ω	未定（7月頃？）	

というわけですが、これからもよろしく願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3271h/>

星のカービィ ゼロの復讐劇IV -再結晶-

2010年10月8日23時41分発行